言語聴覚療法学科

シ ラ バ ス

実務経験のある教員等による授業科目一覧（言語聴覚療法学科）

NO	科目名	単位時間	実務経験内容
1	倫理学	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
2	保健	15	本科目は，看護師として実務経験のある教員による授業である
3	公衆衛生学	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
4	医学総論	30	本科目は，医師・歯科医師として実務経験のある教員による授業である
5	病理学	30	本科目は，医師・歯科医師として実務経験のある教員による授業である
6	薬理学	15	本科目は，薬剤師として実務経験のある教員による授業である
7	栄養学	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
8	内科学	30	本科目は，医師として実務経験のある教員による授業である
9	医科学歯科学総論	45	本科目は，医師・歯科医師として実務経験のある教員による授業である
10	小児科学	30	本科目は，医師として実務経験のある教員による授業である
11	精神医学	15	本科目は，文学修士として実務経験のある教員による授業である
12	リハビリテーション医学	30	本科目は，医師として実務経験のある教員による授業である
13	耳鼻咽喉科学	15	本科目は，医師として実務経験のある教員による授業である
14	臨床神経学	30	本科目は，医師・診療放射線技師・言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
15	形成外科学	15	本科目は，医師・言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
16	看護学	15	本科目は，看護師として実務経験のある教員による授業である
17	運動療法	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
18	臨床歯科学	30	本科目は，歯科医師として実務経験のある教員による授業である
19	口腔外科学	30	本科目は，歯科医師として実務経験のある教員による授業である
20	呼吸発声発語系の構造・機能・病態	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
21	聴覚系の構造・機能・病態	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
22	神経系の構造・機能・病態	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
23	心理演習	30	本科目は，臨床心理学修士として実務経験のある教員による授業である
24	臨床心理学	30	本科目は，公認心理師として実務経験のある教員による授業である
25	カウンセリング論	30	本科目は，公認心理師として実務経験のある教員による授業である
26	心理測定法	30	本科目は，公認心理師として実務経験のある教員による授業である
27	音響学	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
28	聴覚心理学	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
29	言語発達学	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
30	社会保障制度・関係法規	15	本科目は，社会保険労務士として実務経験のある教員による授業である
31	リハビリテーション概論	15	本科目は，言語聴覚士・理学療法士として実務経験のある教員による授業である
32	障害児教育学	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
33	言語聴覚障害総論	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
34	言語聴覚障害診断学	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
35	言語聴覚障害診断学演習	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
36	言語聴覚障害学特論Ⅰ	90	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
37	言語聴覚障害学特論Ⅱ	90	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
38	言語聴覚障害学特論Ⅲ	90	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
39	言語聴覚総合演習	90	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
40	失語症学Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
41	失語症学Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
42	失語症学演習Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
43	失語症学演習Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
44	高次脳機能障害学Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である

NO	科目名	単位時間	実務経験内容
45	高次脳機能障害学Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
46	高次脳機能障害学演習Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
47	高次脳機能障害学演習Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
48	言語発達障害学Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
49	言語発達障害学Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
50	言語発達障害学Ⅳ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
51	言語発達障害学演習Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
52	言語発達障害学演習Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
53	発声発語障害学Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
54	発声発語障害学Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
55	発声発語障害学Ⅲ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
56	発声発語障害学Ⅳ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
57	スピーチリハビリテーション演習Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
58	スピーチリハビリテーション演習Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
59	嚥下障害学Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
60	嚥下障害学Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
61	嚥下障害学演習	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
62	聴覚障害学Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
63	聴覚障害学Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
64	聴覚障害学Ⅲ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
65	聴覚障害学演習Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
66	聴覚障害学演習Ⅱ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
67	聴覚障害学特論Ⅰ	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
68	聴覚障害学特論Ⅱ	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
69	臨床実習Ⅰ	160	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
70	臨床実習Ⅱ	320	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
71	文章作成	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
72	学びの技法	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
73	ライフサイエンス入門	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
74	症例演習Ⅰ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
75	症例演習Ⅱ	60	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
76	地域連携	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
77	言語聴覚療法管理論	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
78	言語聴覚研究	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
79	卒業研究Ⅰ	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
80	卒業研究Ⅱ	15	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
81	卒業研究Ⅲ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
82	卒後研究Ⅳ	30	本科目は，言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である
	合　計	2850	

倫理学

講師：松尾 康弘

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

日本言語聴覚士協会における倫理綱領序文では「言語聴覚士は、自らの責任を自覚し、人類愛の精神のもと、全ての人々に奉仕する」と記されている。言語聴覚士は普遍的に他者を尊重し、自己研鑽を積み、対象者と社会に対して最善を尽くさなければならない。本科目では、臨床において、対象者の人生観や価値観を尊重し、本人のQOLの向上やwell-beingに寄与できる倫理観を得ることを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	人間の尊厳を考える	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
2	倫理4原則について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
3	対象者の自己決定を尊重することの意義について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
4	告知について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
5	身体拘束と行動コントロールの倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
6	守秘義務とその解除・個人情報保護について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
7	希少な医療資源の公正配分について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
8	終末期医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
9	終末期医療（DNAR）の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
10	生殖補助医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
11	遺伝性疾患における倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
12	摂食・嚥下障害の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
13	医療者ー患者（対象者）関係について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
14	倫理コンサルテーションについて理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
15	試験・解説		

■受講上の注意

毎講義終了後、ワークシートを提出してもらいます。

■成績評価の方法

講義への参加態度（20%）・ワークシート提出（40%）・試験（40%）により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

■備考

文学

講師：村瀬 木綿子

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

日本の明治時代の小説『高野聖』を題材に、物語内容や表現の深層に潜む意味を理解し、さらに日本の近代という時代との関連を学んでいく。そして、こうした学習を通して、文学作品という素材をもとに、ものの見方や考え方を身につける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	明治時代、作者泉鏡花について理解する。	講義	受講上の注意を確認し、テキストとノートを用意する。
2	あらすじ、作品全体の構成、各章の構成をつかみ、第2章までを理解する。	講義	第2章までは必ず読み終える。
3	「境界」についての知識を身に着け、第3章までを理解する。	講義	第3章までは必ず読み終える。
4	「蛇」についての文化詩的意味を知り、第6章まで理解する。	講義	第6章までは必ず読み終える。
5	作中のキーワード（「蛇」「蛙」「大森林のトンネル」など）のイメージを理解して、第7～第9章までを理解する	講義	第9章までは必ず読み終える。
6	登場人物（「婦人」）の原像をつかみ、第10章までを理解する。	講義	第10章までは必ず読み終える。
7	登場人物（「婦人」「次郎」など）の関係をつかみ、第11章～12章までを理解する	講義	第12章までは必ず読み終え、あわせて第26章も読む。
8	「水浴び」の場面に注目して、第13～17章を理解する	講義	第17章までは必ず読み終える。
9	「母胎回帰」について理解する	講義	第19章までは必ず読み終える。
10	「水」と物語との関係について理解する	講義	第23章までは必ず読み終える。
11	“高野聖”という言葉の意味とそのイメージを理解し、作品の題名の意味を理解する	講義	第25章までは必ず読み終える。
12	明治30年代についての知識を身につける。	講義	第26章までは必ず読み終える。
13	明治30年代と作品との関連を理解する	講義	試験に向けて、わからないところがないかを確認する。
14	明治国家と作品との関係を理解する	講義	試験準備（テキストの読み返し、疑問点の質問など）
15	終講試験およびまとめ	講義	試験準備（テキストの読み返し、疑問点の質問など）

■受講上の注意

私語は絶対にしない。
授業では毎回テキストを使用するので必ず持ってくる。

■成績評価の方法

終講試験（100%）

■テキスト参考書など

泉鏡花『高野聖、眉かくしの霊』（岩波文庫）

■備考

資料プリントは適宜配布する。

ことばとシンボルの世界

講師：假屋園 明彦

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

ある物を別の物で表現する機能をシンボル機能と呼ぶ。シンボル機能は人間の思考の大きな特徴の一つであり，人間の人間たるゆえんは，まさしくこのシンボル機能にあると言える。本講義では，人間の思考の代表的な特徴であるシンボル機能について考察する。まず人間のシンボル操作の学問である記号論における基本的用語，概念を紹介する。そのうえでシンボルの世界に生きる存在としての人間のあり方を紹介する。具体的には，言語，哲学，芸術の領域から代表的な理論と実例を紹介する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	シンボルの意味　記号論とはどんな学問で何を対象とするのか	講義	
2	記号論の基礎概念（1）　ことばのしくみ	講義	
3	記号論の基礎概念（2）　ことばの意味と意味作用	講義	
4	記号論の基礎概念（3）　文節と意味作用	講義	
5	記号としての言語（1）：記号としての世界	講義	
6	記号としての言語（2）：日常的な記号世界	講義	
7	記号としての言語（3）：ソシュールの言語学：構造主義の誕生	講義	
8	記号としての言語（4）：ソシュール言語学：構造主義の展開	講義	
9	記号としての言語（5）：ソシュール言語学：構造主義と記号論	講義	
10	パースの記号論（1）	講義	
11	パースの記号論（2）	講義	
12	芸術における記号論：図像解釈学の紹介	講義	
13	芸術における記号論：図像解釈学の実例	講義	
14	民話・神話における記号論	講義	
15	文化記号論とはなにか	講義	

■受講上の注意

■成績評価の方法

筆記試験（100%）

■テキスト参考書など

記号論への招待（岩波書店）

■備考

基礎教育学

講師：髙谷 哲也

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

教育学分野の基礎的な専門知見を学ぶ。

人間が成長するうえで教育が果たす役割、教えることと学ぶことの関係、生涯にわたり学び続けていくということの意味などについて、理解を深めてもらう。加えて、ものごとを教育学的にみることのできる力を獲得することに重きを置く。そのため、実際に他者と協力しながら学ぶ演習に取り組みながら、そこから専門的な概念や事象の意味を理解したり、様々な学び方を身につけたりする学習方法も獲得してもらう。

基礎的な教育学の専門的概念やものの見方を獲得し、医療やヒューマンサービス分野における営みに自身の力で応用していける専門的力量を身につけてもらう。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「教育学」という学問の特徴と本授業の進め方を体験する	演習・GW	不安な事があれば遠慮なくお知らせください。
2	理想の教育像が経験に左右されることを理解する	講義・GW・映像視聴	グループでの演習の進め方のコツをつかめるよう意識しましょう。
3	学習・成長・発達等の基本概念を理解する	講義・GW・映像視聴	グループでの演習の進め方のコツを覚えましょう。
4	子どもの成長に関する理解を深める	講義・GW・映像視聴	他者と対話をしやすい空気の作り方を意識しましょう。
5	子どもの内面の複雑さと成長を促す要素について学ぶ	講義・GW・映像視聴	自分と価値観・考え方が異なる人に真摯に学ぶスタイルを獲得しましょう。
6	学習者の成長可能性への着目の重要性を理解する	講義・GW・映像視聴	自分の考えを正確に伝えることを意識しましょう。
7	訓育の概念とケアを基盤とした教育の動向について学ぶ	演習・GW	自分たちで学びを創りあげる学習に挑戦してもらいます。
8	教育と学習、教えることと学ぶことの関係を整理する	演習・GW	自分たちで学びを創りあげる際に必要なことを意識しましょう。
9	家庭教育と社会化の概念を理解する	演習・GW	自分の力だけでは不安な時に、いかに上手に助けを借りるかに挑戦しましょう。
10	教育におけるメディアの概念を理解する	講義・演習・GW	難解な概念や文章を読み解く際に、他者の力をいかに借りるかを考えましょう。
11	院内学級における教師の子どもとの向きあい方に学ぶ	講義・GW・映像視聴	映像資料を細部まで観察しながら視聴することを心がけましょう。
12	教育評価の基礎について理解する	演習・GW	他者の課題に対してフィードバックする際の心がけを意識して取り組みましょう。
13	「省察」を通した専門職の成長について学ぶ	講義・GW・映像視聴	自分を客観視・メタ認知できるようになるために何が必要か復習しておきましょう
14	教育と学びを左右する学習観・教育観について理解する	講義・GW	これまでの学びの自分なりの意味づけ・意義づけをして最終課題に備えましょう。
15	本授業を通した学びをふり返り、最終課題を完成させる	講義・演習試験	個人の力と他者と協働する力の両面を発揮して最終課題に取り組みましょう。

■受講上の注意

他者と協力しながら学ぶ機会を多く設定しているため、互いに学びを楽しめるためには何が必要かを考えるとともに、遠慮なく他者の力を借りることができるようになってもらいたい。

■成績評価の方法

1. 各回の演習・議論への取り組み状況、提出ワークシートの評価（30%）
2. 各回の演習・思考内容を記載していく記録シートの評価（20%）
3. 最終課題（50%）

■テキスト参考書など

【参考書】

・木村元編（2015）『系統看護学講座 基礎分野 教育学』医学書院。

■備考

授業では適宜資料プリントを配付する。

公衆衛生学

講師：青山 公治、小牧祥太郎

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

医療従事者にあっては、患者の健康事象はその患者を取り巻く生活要因と地域社会と密接に係わっているという視点を持つことが必要である。そのような意味で、将来、公衆衛生的素養をもった言語聴覚士として活躍するために必要な基礎的知識・技術および習慣・態度を身につけること。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「健康と公衆衛生学」健康の概念とその規定因子を説明できる。公衆衛生は疾病防止と健康保持増進を図るために集団（公衆）を入口としてアプロー チする科学と技術であることを理解する。	講義	教科書、関連配布資料、板書に基づき授業を進める。予習は教科書、復習は教科書、配布資料、板書を見返し整理すること。
2	「公衆衛生活動」疾病予防と 健康保持増進に向けて疾病の自然史を理解する。各段階に対応した予防対策と公衆衛生活動を説明できる。	講義	
3	「保健統計」集団としての健 康度を計る指標を列挙し、それぞれの指標によるわが国の国民衛生の動向について説明できる。 講義 4「疫学とは」疫学が如何なる目的をもった学問であるかを説明できる。	講義	
4	「疫学とは」疫学が如何なる目的をもった学問であるかを説明できる。公衆衛生における疫学の重要性について理解する	講義	
5	「疫学研究の方法」主な疫学研究の方法について説明できる。	講義	
6	「疫学研究と統計解析」疫学研究における疾病と要因の関連性と因果性の判断となるポイントを列挙できる。疫学研究で必要な統計解析の簡単な演習を行い、理解を深める。	講義 演習	電卓を使用する
7	「環境保健」健康はヒトと環境との相互作用により成立していることを理解し、地球環境汚染の現状とそれらの健康影響について説明できる。	講義	DVD供覧においてはレポートの提出を求めることがある。
8	「生活環境と健康」生活環境による健康影響と予防対策について説明できる。	講義	
9	「感染症対策」我が国の感染症の発症状況と予防対策としての制度について説明できる。	講義	
10	「生活習慣病の予防対策」生活習慣病の危険因子と生活様式から予防対策を説明できる。	講義	
11	「地域保健」、「母子保健」同じような生活基盤の中の地域住民の健康保持増進を図るためには地域保健活動が重要であることを理解する、地域の母子を対象とした保健対策の大切さを理解し、我が国の母子保健の現状と課題について説明できる。	講義	
12	「高齢者保健」高齢社会にあって、中高年からの健康づくり、高齢者医療制度、老人福祉対策および介護保険制度の目的、現状および今後の改題について理解する。健康寿命について考える。	講義	
13	「学校保健」学校における保健活動の目的と活動内容について説明できる。教育の場であるが故の活動の特徴について述べることができる。	講義	
14	「産業保健」職場での健康保持増進を図るためには個人の努力だけではげないがあることを理解する。勤労に伴う労働災害や健康障害を防止するための事業所の保健活動と制度対策を説明できる。	講義	
15	「終講試験とまとめ」	試験 講義	

■受講上の注意

講義だけでなく、公衆衛生に関連する社会情報にも関心を持ちながら理解を深めること。

■成績評価の方法

終講試験（90%）とレポート（10%）

■テキスト参考書など

テキスト『社会・環境と健康　公衆衛生学』2018　医歯薬出版（株）
参考書『国民衛生の動向』（財）厚生統計協会

■備考

統計学

講師：島 義弘

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

統計学的な考え方を理解し，統計学の基本的な知識を修得することを目標とする。この科目を通して，実際のデータを扱う中で，適切な統計処理を施し，正しく報告・解釈できるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	統計学の概要を理解できる	講義	該当箇所の復習（教科書，レジュメ）
2	尺度水準を理解し，データの図表で表すことができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
3	代表値の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
4	散布度の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
5	標準化の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
6	相関係数の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
7	推測統計学の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
8	母集団と標本について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
9	正規分布について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
10	不偏性について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
11	統計的仮説検定の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
12	2つの平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
13	3つ以上の平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
14	カテゴリ変数の連関を調べることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

欠席をしないこと。演習課題には積極的に取り組むこと。私語は厳禁，ただし，講義中の演習課題で分からないところは積極的に教員や他の受講生に質問し，理解に努めること。

■成績評価の方法

終講試験100%

■テキスト参考書など

『よくわかる心理統計』 山田剛史・村井潤一郎（著） ミネルヴァ書房

■備考

教科書のほかに，レジュメを配布する。電卓はあったほうがよい。

情報科学

講師：小牧祥太郎

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

昨今の医療現場においてコンピューターの使用は拡大しており、基本的な操作が行える事が必須のものとなっている。本講義にて、パーソナルコンピューターによる代表的なソフトウェアの操作が行える技術を身に付ける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	コンピューターの挙動を理解し、windowsの基本操作になれる。	講義・演習	特になし
2	データ管理法について学ぶ。wordの基本操作になれる。	講義・演習	USBメモリを持参する。
3	Wordの応用操作（図や表の挿入）を習得する。	講義・演習	USBメモリを持参する。
4	作成データの紙媒体出力の行い方、PDFへの変換方法を習得する。メールアドレスのアカウントを取得する。	講義・演習	USBメモリを持参する。
5	Powerpointの基本的な操作を学ぶ。	講義・演習	USBメモリを持参する。
6	Powerpointにてプレゼンテーション資料を作成する。 メールの基本文例を学び、送受信を習得する。	講義・演習	USBメモリを持参する。 自己紹介のスライドを作成してもらいます。
7	Powerpointで作成したスライドを用いてプレゼンテーションを行う。	演習	自己紹介を実施してもらいます。
8	Excelの基本操作を学ぶ。	講義・演習	Excelの基本操作より、簡易なカレンダーの作成を行います。（USBメモリを持参する）
9	Excelでのデータ入力・管理について理解する。	講義・演習	USBメモリを持参する。
10	Excelの関数を用いて、データ集計の基本を学ぶ。	講義・演習	USBメモリを持参する。
11	Excelの書式を調整し、審美性の高い表を作成する。	講義・演習	USBメモリを持参する。
12	Excelに入力したデータより、グラフを作成する。	講義・演習	USBメモリを持参する。
13	インターネットを使用した文献検索の行い方、Webより図・表等の加工・引用の仕方について学ぶ。	講義・演習	USBメモリを持参する。
14	officeソフトの使用方法のまとめ	講義・演習	USBメモリを持参する。
15	単位認定試験・解説		USBメモリを持参する。

■受講上の注意

毎回の成果物を保存出来るように、USBメモリは毎回準備する事。また、紛失等起こさないよう保管には細心の注意を払うこと。

■成績評価の方法

単位認定試験（課題作成） 100%

■テキスト参考書など

適宜、資料配布

■備考

基本的にコンピューター室にて講義を行います。

生命科学

講師：東 四郎

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

生命活動を維持するには如何なる生体の機構が関わっているかについて、受講生の関心を誘導する。特に生物体を構成する細胞・組織・器官等の相互情報伝達・交換に必要な分子生物学的機序を基礎として、生命体の本質を生物学的立場から学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	細胞の機能と構造について理解する	講義	
2	細胞の増殖（細胞分裂）について理解できる	講義	
3	遺伝物質としての核酸を理解できる	講義	
4	核酸（DNA・RNA）の構造を理解する	講義	
5	DNAの自己複製について理解できる	講義	
6	DNAの遺伝情報とRNAによる蛋白質合成を理解できる	講義	
7	蛋白質合成のプロセスを理解できる	講義	
8	蛋白質の構造と性質を理解する	講義	
9	遺伝性疾患と酵素について理解する	講義	
10	蛋白質と形質の発現を理解できる	講義	
11	血液の凝集反応について理解できる	講義	
12	細菌毒素、病原性と毒素について理解できる	講義	
13	タンパク質毒素の作用機構を理解できる	講義	
14	ベロ毒素の構造と作用機構について理解できる	講義	
15	単位認定試験・まとめ		

■受講上の注意

■成績評価の方法

期末試験（90%）、出席日数、臨時に提出させるレポート（10%）の総合判定

■テキスト参考書など

齋藤省吾：新体系看護学〔基礎科目〕 生物学，メジカルフレンド社

■備考

英語Ⅰ

講師:永田 かなえ

単位数:2単位　時間数:30時間　授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

日常英語において「センテンス・レベル」のライティングだけでなく、「パラグラフ・レベル」のライティングにも対応できるようにし、内容的にまとまりのある複数の英文を書くことのできる力を身につけてもらうことを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	進行形の文の形と使い方を理解できる リスニング力を鍛え進行形を使った英文を作ることができる	CD・講義	聞くことに集中する。進行形とはどのよう なものか予習を行う。 進行形の基本をおさらいし、応用に繋げる
2	未来形の文の形と使い方を理解できる 未来形を使った英文を作ることができる	講義	未来形とはどのようなものか予習を行う。 課題の確認 未来形の基本をおさらいし、応用に繋げる
3	助動詞の種類を覚え、文の作り方と使い方を理解する	講義	助動詞とはどのようなものか予習を行う。 課題の確認
4	リスニング力を鍛え助動詞の種類を学び、使い方の意味まで理解することができる	CD・講義	聞くことに集中する。助動詞をつかった英 文はどのように作るのか予習を行う。
5	受動態のさまざまな文の形を理解し、使い分けができる 受動態の様々な形に対応し英文を作ることができる	講義	受動態とはどのようなものか予習を行う。 課題の確認
6	比較の語形変化を覚え、基本形を理解する リスニング力を鍛え比較の規則的な変化と不規則な変化を理解し英文を作ることができる	CD・講義	聞くことに集中する。比較とはどのような ものか予習を行う。 比較の語形変化を覚え、確認する。
7	不定詞の用法を理解し、不定詞を使った基本的な文を作ることができる 不定詞を使った応用文を作ることができる	講義	不定詞とはどのようなものか予習を行う。 課題の確認 不定詞の用法を使い分ける。
8	現在完了の用法を理解し、基本的な文を作ることができる 現在完了を使った応用文を作ることができる	CD・講義	聞くことに集中する。現在完了とはどのようなものか予習を行う。 課題の確認
9	分詞の用法・分詞構文を理解し、基本的な文を作ることができる リスニング力を鍛え、現在分詞、過去分詞を使った英文を作ることができる	CD・講義	聞くことに集中する。分詞とはどのようなものか予習を行う。 課題の確認
10	動名詞の用法を理解し、基本的な文を作ることができる 動名詞を使った応用文を作ることができる	講義	動名詞とはどのようなものか予習を行う 課題の確認
11	前置詞の種類を覚え、場面ごとに使い分けができる リスニング力を鍛え、前置詞を使った英文を作ることができる	CD・講義	聞くことに集中する。前置詞とはどのようなものか予習を行う。 課題の確認
12	間接疑問文とは何かを理解し、英文を作ることができる リスニング力を鍛えることができる	CD・講義	聞くことに集中する。間接疑問文とはどのようなものか予習を行う。
13	接続詞の使い方を理解し、等位接続詞と従位接続詞を使いこなすことができる	講義	接続詞にはどのような種類と働きがあるのか予習を行う。 課題の確認
14	関係代名詞の用法を理解し、基本文から応用文まで作ることができる	CD・講義	聞くことに集中する。関係代名詞とはどのようなものか予習を行う。
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

■受講上の注意

事前準備、講義の予習をしてくること。テキストと電子辞書(英和・和英機能のあるもの)を忘れずに持ってくること。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験(80%), 授業への参加態度(20%)

■テキスト参考書など

日常英語ライティング入門　Three -line writing in English

■備考

英和・和英辞書もしくは電子辞書(英和・和英機能のあるもの)を必ず持参する

英語Ⅱ

講師：飯田 敏博

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

基本的な文法を理解し、英語の聞き、話し、読み、書く基礎力を身に付けることができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Be動詞、Have動詞を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
2	一般動詞を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
3	名詞、冠詞、代名詞を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
4	時制：現在形、現在進行形を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
5	時制：過去形、過去進行形、単純未来、意志未来を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
6	時制：現在完了、過去完了を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
7	疑問詞、助動詞:can, be able toを理解できる	講義・GW	予習・復習すること
8	助動詞：may, must, need, dareを理解できる	講義・GW	予習・復習すること
9	形容詞、副詞、受身を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
10	同等比較、比較級、最上級を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
11	不定詞を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
12	分詞を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
13	動名詞、接続詞を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
14	関係詞を理解できる	講義・GW	予習・復習すること
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

授業の予習の際に練習問題は必ず解いてくること。テキストと、英和・和英辞典、あるいは電子辞書（英和・和英機能のあるもの。英英辞典の機能が付くとさらに良い）を必ず持参すること。予習・復習の際に英語の音読を行うこと。

■成績評価の方法

試験（80%）、授業への参加態度（20%）

■テキスト参考書など

テキスト：Keystone-Grammar-based English Writing- （基本英文から現代英語表現へ）成美堂

■備考

資料プリントは適宜配布する。

体育

講師:廣田 大悟

単位数:1単位	時間数:45時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

バレーボール及びバスケットボールの基本的な動きを身につける。また、スポーツを通じて、コミュニケーション能力の向上やストレスの軽減を図り、日常生活の中で、運動をする習慣を身につける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	科目目標をしっかり理解し、バレーボールのルールをしっかり理解できる。	講義・実技	教室でガイダンスを行い、体育館へ移動するので体育ができる服装に着替えてから、教室で待機する
2	パスができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
3	サーブができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
4	パスを使ったゲームができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
5	ゲームでの一連の動きができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
6	実技試験用練習	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
7	実技試験	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
8	自分たちで試合の運営ができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
9	レポート作成の内容を理解し、チーム作業を行うことができる	講義・GW	教室で説明を行い、その後チーム決めをし、チームで行動する
10	チームで話し合い自分たちの作業や実技(複数競技から選択)を行うことができる	講義・GW	レポート作成か実技のどちらを行うかをグループで選択し行動する
11	チームで話し合い自分たちの作業や実技(複数競技から選択)を行うことができる	講義・GW	レポート作成か実技のどちらを行うかをグループで選択し行動する
12	チームで話し合い自分たちの作業や実技(複数競技から選択)を行うことができる	講義・GW	レポート作成か実技のどちらを行うかをグループで選択し行動する
13	チームで話し合い自分たちの作業や実技(複数競技から選択)を行うことができる	講義・GW	レポート作成か実技のどちらを行うかをグループで選択し行動する
14	チームで話し合い自分たちの作業や実技(複数競技から選択)を行うことができる	講義・GW	レポート作成か実技のどちらを行うかをグループで選択し行動する
15	チームで話し合い自分たちの作業や実技(複数競技から選択)を行うことができる	講義・GW	課題レポート提出
16	バスケットボールのルールが理解し、パスができる	実技	教室で説明を行い、体育館へ移動するので体育ができる服装に着替えてから、教室で待機する
17	シュートができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
18	ドリブルができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
19	ランニングパスができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
20	試合での一連の動きができる	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
21	実技試験用練習	実技	体育ができる服装・シューズを準備する

22	実技試験	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
23	総復習	講義・実技	体育ができる服装・シューズを準備する

■受講上の注意

運動できる服装及び体育館用運動シューズを用意すること
忘れ物の無いようにし、規範意識を持ち、積極的に講義に臨むこと

■成績評価の方法

平常点（30%）、実技試験（40%）、レポート（30%）により、総合的に評価する

■テキスト参考書など

特になし
必要な場合は、適宜プリントを配布する

■備考

保健

講師:冨安 恵子、東 直子

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

健康はさまざまな要因の影響をうけているが，それらは，「人間の生物としての側面」「生活習慣」「環境」「保健・医療サービス」の4つに分けて 考えることができる。
本講義では、看護師・保健師における保健・医療サービスの概要を知るとともに、疾病の予防や健康増進、ならびにその具体的活動について学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	保健師、助産師、看護師について	講義	
2	保健所における保健師・看護師の役割と具体的活動	講義	
3	市町村における保健師・看護師の役割と具体的活動	講義	
4	市町村における保健師・看護師の役割と具体的活動	講義	
5	健診センター等における保健師・看護師の役割と具体的活動	講義	
6	事業所における保健師・看護師の役割と具体的活動	講義	
7	学校における保健師・看護師の役割と具体的活動	講義	
8	課題レポート作成	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

出席状況、態度、課題レポートを総合的に評価する。

■テキスト参考書など

適宜、資料を配付

■備考

医学総論

講師：山下 佐英、青山 公治

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

医学では、人間の健康とは何か、さらに健康が失われると、病気はどのような原因やしくみで、どのような症状や所見、身体構造の変化を伴って発症するのかを明らかにした上で、病気と対峙する。

医学とは、病気を乗り越えて健康を維持しようとする人間の知的活動であり、その医学に基づく行為が医療です。そして、医学のConceptのもとで行われる医療全般のEssenceを知ることは、将来、専攻するどの領域の医療においても重要である。医療のTeam-Workに加わる各種領域の医療専門職者にとっても、専門外の医療全般のEssenceを理解し共有することは、効果的なTaem-Workを進める上で極めて有用である。

本授業では、各章毎に解説を加え、豊富な学識を体得することを目標としている。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	医学の基本が理解できる	講義	テキスト「医学概論」の医学の基本を読んでくる
2	医学の歴史が理解できる	講義	テキストの医学の歴史を読んでくる
3	人体の構造と機能が理解できる	講義	テキストの人体の構造と機能を読んでくる
4	環境・文化と人間の健康が理解できる	講義	テキストの環境・文化と人間の健康を読んでくる
5	病気の基本が理解できる	講義	テキストの病気の基本を読んでくる
6	病因・病態別の病気の分類が理解できる	講義	テキストの病因・病態別の病気の分類を読んでくる
7	器官・領域別の病気の種類が理解できる	講義	テキストの器官・領域別の病気の種類を読んでくる
8	病気の診断が理解できる	講義	テキストの病気の診断を読んでくる
9	病気の治療と予防が理解できる	講義	テキストの病気の治療と予防を読んでくる
10	医療の基本が理解できる	講義	テキストの医学の基本を読んでくる
11	医療の現場が理解できる	講義	テキストの医療の現場を読んでくる
12	社会医学の視点：公衆衛生学が理解できる	講義	テキストの社会医学の視点：公衆衛生学を読んでくる
13	予防医療が理解できる	講義	テキストの予防医療を読んでくる
14	社会の医療情勢と医療体制、医療法規と医療行政が理解できる	講義	テキストの社会の医療情勢と医療体制、医療法規と医療行政を読んでくる
15	終講試験、まとめ、解説	試験	

■受講上の注意

私語はしないこと、講義の予習をしてくること、
忘れ物の無いようにし、主体的に集中して講義に臨むこと

■成績評価の方法

出席状況・受講態度・終講試験などにより総合的に評価する

■テキスト参考書など

中島 泉 著：医学概論，南江堂

■備考

講義資料については適宜配布する

解剖学 I

講師:津山 新一郎

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:1学年
必修選択:必修		

■科目目標

ヒトの身体の構成を肉眼解剖学、顕微解剖学、発生学の観点から系統的に理解する。その理解の為に人体構成を物質レベルから細胞、器官、器官系の)順に階層性に従い学習 する。常に機能との関連性を念頭において形態学を基本としながら肉眼角精1レベルから 顕微解剖レベル迄を理解・学習する。解剖学I(前期)では解剖学の導入から総論的部分、 細胞学・組織学、そして全身の系、骨格系・筋系・脈管系の理解を目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	序論:ヒトの身体の基本の構 成、細胞が理解できる	講義	人体の成立ちにおける階層性の理解. 予・復習と図・アトラス利用の必要性
2	細胞の構造、組織の構成①上 皮組織が理解できる	講義	細胞、組織、器官の構成、機能の理解. 細胞種間、組織間の比較ができる
3	組織の構成②結合・支持組 織, ③筋組織, ④神経組織が理 解できる	講義	各組織の違いの意義、人体における意味の 理解が出来る
4	骨格系:概論骨の構造、発生・ 成長、骨の連結が理解できる	講義	ヒトの骨格系の全体的把握を述べること が出来るようになる。骨格模型の利用
5	全身の骨格①頭頚部, ②体 幹部が理解できる	講義	頭蓋の骨配列と血管、神経の分布の理解. 頭蓋骨格模型のスケッチ
6	全身の骨格③上・下肢の構 成が理解できる	講義	体幹、体肢における支柱としての骨格の意 義を調べる
7	筋系:概論筋の形・構造、作 用が理解できる	講義	全身の筋と運動(関節)の関連性を理解で きる
8	全身の筋①頭部および頚部, ②体幹部が理解できる	講義	運動器としての筋と骨格の関連性の理解
9	全身の筋②上肢, ③下肢の 動き、作用が理解できる	講義	運動器としての体肢の理解が出来る. 小テスト(これまでのまとめ)
10	脈管系:概論血管の構造、肺 循環と体循環が理解できる	講義	ヒトの身体の循環系の生理的意義と循環 系の分布の理解
11	脈管系:①心臓の構造、働きが 理解できる	講義	心臓の構成と機能の理解:血圧、拍動のチ エック
12	脈管系:動脈②体循環動脈 系:脳、体幹、上肢・下肢の循 環系が理解できる	講義	全身の動脈の分布意義の理解、脈拍の触れ やすい場所での脈拍測定
13	脈管系:静一脈、リンパ系③ 体循環静脈系、リンパ系、胎 生循環が理解できる	講義	全身の動・静脈の機能と意義の理解. 胎生循環と成人の循環の比較
14	血液・免疫系の構成が理解できる	講義	血液の働きの理解
15	終講試験とまとめ	試験	

■受講上の注意

範囲が広いのでテキストの当該範囲を必ず通読して受講すること 人体構造の立体的(3 次元)理解のため図版・アトラスの利用 トレーニングノートの重用

■成績評価の方法

評価は中間試験30%、終講試験70%、平常点(受講態度)等を総合して行う

■テキスト参考書など

教科書:カラー図解 新しい人体の教科書 上・下巻、講談社

■備考

講義とパソコン等の視覚教材および模型等の観察等により実体的理解を目指す. 講義資料は適宜プリントを配布する.

解剖学Ⅱ

講師：津山 新一郎

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

解剖学I・Ⅱ（1年次前・後期）は一連のものであり、Ⅰの理解の上にⅡが積み上げられる。解剖学Iの序論・総論的部分・細胞・組織学・骨格・筋系・脈管系など全身の系の理解習得をベースとして、解剖学IIに発展させる。肉眼解剖レベルから顕微解剖レベル迄 を常に機能との関連性を念頭において理解・学習する。内臓系、発生、神経系、感覚器系を学習しヒトの身体の体系づけた理解・まとめを行う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	呼吸器系：鼻腔、気道（咽・喉頭，気管支）、肺（細気管支と肺胞）の理解	講義	ガス交換の意義と構造、生理学との関連性 喉頭部‘声帯の3次元的理解、模型利用
2	消化器系：口腔、咽頭、消化管（食道，胃，小腸）が理解できる	講義	栄養摂取と消化管の構造との関連性の理解
3	消化器系：消化管（大腸）、消化 腺：肝臓、陣臓が理解できる	講義	ヒトの身体の代謝における消化液分泌腺 の働きの理解
4	泌尿器系：腎臓、尿管、膀胱、尿道が理解できる	講義	尿生成のプロセスの組織学的理解
5	生殖器系：(1)男性生殖器　精巣：精子形成、精路の成立ちが 理解できる	講義	男性生殖子の形成と染色体の理解
6	生殖器系：(2)女性生殖器卵 巣：卵子形成、卵管，子宮，腔、乳腺の成立ちが理解できる	講義	女性生殖子の形成と受精後の各器官の変化
7	ヒトの発生のあらまし（発生学）受精、腫葉形成器官発生から生下までの理解	講義	発生と胎盤、胎生循環の理解
8	内分泌系：下垂体、松果体、甲 状腺、上皮小体、副腎、騨臓、性腺の存在場所と細胞・組織的 構成の理解	講義	ホルモンの作用とフィードバックのメカニズムについての理解 小テスト（これまでのまとめ）
9	神経系：中枢神経脳、脊髄 組織学的構成と機能の理解	講義	ヒト脳と脊髄の理解と働き
10	神経系：末梢神経脳神経 分布、働きの理解	講義	中枢神経の組織学的理解を加える 脳と脊髄の機能局在と組織構造との関連性
11	神経系：末梢神経脊髄神経 分布とその働き	講義	末梢神経の分布と感覚器の働きの関連性の理解
12	感覚器系：視覚器、味覚・嗅覚器 働きと組織学的構成の理解	講義	感覚器の細胞学的知覚機構について
13	感覚器系：平衡聴覚器聴器 骨迷路と膜迷路の構成と機能 の理解	講義	膜迷路蝸牛管と聴覚について、聴覚の認知機構について
14	感覚器系：平衡聴覚器聴器・ 平衡器内耳の組織細胞学的な理解	講義	聴覚と平衡覚の感受機構の共通性と細胞学的構成
15	終講試験とまとめ		終講試験とまとめ

■受講上の注意

範囲が広いのでテキストの当該範囲を必ず通読して受講すること
人体構造の立体的（3次元）理解のため図版・アトラスの利用
トレーニングノートの重用

■成績評価の方法

評価は中間試験30%、終講試験70%、平常点（受講態度）等を総合して行う.

■テキスト参考書など

教科書：カラー図解　新しい人体の教科書　上・下巻、講談社

■備考

講義とパソコン等の視覚教材および模型等の観察等により実体的理解を目指す．講義資料は適宜プリントを配布する.

解剖学Ⅲ

講師：村田 長芳

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

解剖学は形態学である。まず人体を構成する諸要素について肉眼解剖学的にこれを把握する。その中の代表的なものについては顕微鏡レベルでの把握にも努める。さらに、形の把握の上に、それぞれの人体の構成要素がどのような機能を営んでいるかの理解をする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	細胞・組織・器官・細胞小器官	講義	人体の基本構成単位
2	感覚器1	講義	平衡聴覚器
3	中枢神経系1	講義	大脳
4	中枢神経系2	講義	大脳以外
5	呼吸器	講義	構成と機能
6	感覚器2	講義	平衡聴覚器以外の感覚器
7	消化器	講義	消化管と消化腺
8	循環器	講義	心臓，動脈、静脈、リンパ管
9	脳神経	講義	12対の脳神経の形態と機能
10	脊髄神経	講義	上半身中心の脊髄神経
11	骨	講義	約215個の骨を知る
12	泌尿生殖器	講義	泌尿器、男女生殖器
13	筋	講義	全身の骨格筋
14	内分泌器・自律神経	講義	ホルモン、交感副交感神経
15	試験	試験	

■受講上の注意

膨大な情報を要領よく、系統的に理解する。ばらばらな知識は役立たない。
人に対する尊厳を忘れない。

■成績評価の方法

試験（90%）、レポート・出席状況（10%）で評価

■テキスト参考書など

山科 正平：カラー図解　新しい人体の教科書　上・下巻，講談社
Frank H　Netter：ネッター解剖学アトラス，南江堂
竹内　修二：解剖トレーニングノート，医学教育出版社

■備考

生理学Ⅰ

講師：笠井 聖仙

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

「生理学をⅠⅡ」を通して、高度に複雑化した人体の生存に必須の機能について学習するが、生理学Ⅰでは、まず、次のようなことを目標にして学習してほしい。
人体を構成する基本的な細胞や組織の機能について説明できる。
外部環境から酸素を取り込み全身の細胞へ運ぶ、血液・循環器系・呼吸器系の基本的な機能について説明できる。
身体が外界からの刺激を感知し応答する特殊感覚や神経系の基本的な機能について説明できる。
これらの組織や器官が全身のはたらきがうまくいくように互いに協調し合っていることを説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	一般的な細胞の機能を理解し、細胞内小器官や細胞膜の主な機能を説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
2	DNA の複製過程と有糸分裂、タンパク質合成とRNAの役割について説明できる。	講義	授業に先立ち要約プリントと教科書の図表に目を通す。
3	4種類の主な組織が機能的にどのように異なっているか、組織修復の過程を理解できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
4	血漿の成分と血中における重要性を理解できる。血液中の各細胞の機能を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
5	血液の凝固過程を説明できる。ABO式およびRhの血液型を理解し、輸血反応が起こる機序を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
6	心臓の刺激伝導系、収縮、拡張、1回拍出量、心周期の意味を説明できる。	講義	要約コピーと教科書の図表の事前学習をする。
7	血圧に影響する因子をあげて説明できる。心電図からどのような情報が得られるか説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をチェックする。
8	網膜の杆体と錐体の機能と画像処理の仕組みを説明できる。視覚伝導路視覚のしくみを説明できる	講義	講義に先立ちこれまでの学習内容について中間試験を行う（約20分）。 要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
9	聴覚・静的平衡覚・動的平衡覚を説明できる。嗅覚・味覚受容器の機能と支配する神経を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
10	外呼吸・ガス交換・内呼吸の仕組みを説明できる。吸気と呼気の仕組みと肺気量の用語を定義できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
11	呼吸調節の仕組みについて、神経系と非神経因子に区別して説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
12	神経細胞と神経膠細胞の機能を説明できる。活動電位の発生と伝導・シナプスでの情報伝達を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
13	反射の種類と反射弓の構成要素をあげることができる。脳を4大別してそれぞれの機能を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
14	脳神経名称をあげ、主要な働きを説明できる。自律神経系を2大別してそれぞれの機能を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

テキストには、自学自習できるように、復習問題や「確認してみよう」などの設問が設定されている。授業では、図や表をもとにパワーポイントで解説するが、その内容を理解するために、配布したプリントに事前に目を通し、授業で得た知識をもとに、さらに復習問題や確認事項にも積極的に取り組んでほしい。

■成績評価の方法

終講試験（85% ）・平常点（15% ）。平常点は「30問の問題集」について提出した解答をもとに採点する。
中間試験の結果は、終講試験のうち、後半（8～14回）の学習内容の試験結果との平均点として換算する。

■テキスト参考書など

テキスト：「人体の構造と機能」第4版　エレイン・N・マリーブ著　林正　健二ほか訳、
医学書院
参考書：「よくわかる生理学の基本としくみ」當瀬規嗣著　秀和システムほか
テキストの内容をより確実に理解するために、医学用語の語源・機能・存在部位等を一覧表にして随時配布する。

■備考

授業内容の要約プリントは前もって配布する。

生理学Ⅱ

講師：山下 智

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

生理学Ⅱでは次のようなことを目標に学習してほしい。
内分泌系が神経系と密接に関連してはたらき、人体のあらゆる細胞の活動を制御することを説明できる。
筋は身体の運動だけでなく、食物や尿などが消化器系や泌尿器系を運ばれるのに役立つことを説明できる。
代謝は栄養素と酸素を供給する消化器系と呼吸器系や、運搬役の心臓血管系に依存することを説明できる。
免疫細胞が体内の細菌や異物を除去する防御機構とリンパ系と心臓血管系の血管との関係を説明できる。
細胞分裂と生殖は生命の維持に必須の機能で、生殖器の機能は内分泌系により調節されることを説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ホルモンがどのような刺激でどのように作用するか、基本的な仕組みを説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
2	主なホルモンのはたらきと生体の恒常性の調節との関係を説明できる	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
3	3種の筋組織の基本的な機能と骨格筋フィラメントの収縮に対する役割を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
4	神経筋接合部の神経伝達物質と活動電位の関係と、筋収縮のしくみをフィラメント滑走説で説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
5	口腔内と胃で起こる化学的消化を分解酵素や局所ホルモン用いて説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
6	小腸で起こる消化吸収を膵液の酵素や胆汁と、迷走神経や局所ホルモンの作用をもとに説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
7	三大栄養素の代謝の基本的な特徴を述べ、グルコースの代謝経路とATP産生について説明できる。	講義	講義に先立ちこれまでの学習内容について中間試験を行う（約20分）。 要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
8	代謝機能における肝臓の役割と、代謝と体温調節の関係につい説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
9	腎小体と尿細管による尿生成のしくみを説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
10	体液の水や電解質平衡における腎臓の役割についてホルモンや口渇機構を用いて説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
11	自然免疫の仕組みについてその概略を例を挙げて説明できる	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
12	獲得免疫の2反応の特徴と作用機構について説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
13	精子形成と卵子形成の過程と両性のホルモンの生成と機能について説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
14	受精から分娩に至る過程の概略と母体における生理学的変化を説明できる。	講義	要約プリントと教科書の図表の事前学習をする。
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

テキストには、自学自習できるように、復習問題や「確認してみよう」などの設問が設定されている。授業では、図や表をもとにパワーポイントで解説するが、その内容を理解するために、配布したプリントに事前に目を通し、授業で得た知識をもとに、さらに復習問題や確認事項にも積極的に取り組んでほしい。

■成績評価の方法

終講試験（85% ）・平常点（15% ）。平常点は「30問の問題集」について提出した解答をもとに採点する。
中間試験の結果は、終講試験のうち、後半（８～14 ）の学習内容の試験結果との平均点として換算する.

■テキスト参考書など

テキスト：「人体の構造と機能」第4版　エレイン・N・マリーブ著　林正　健二ほか訳、
医学書院
参考書：「よくわかる生理学の基本としくみ」當瀬規嗣著　秀和システムほか

■備考

授業内容の要約プリントは前もって配布する。

病理学

講師:山下 佐英

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

病理学は、疾病の本態とその原因、成り立ちおよび結果などについて理論的、体系的に学ぶもので、医学的位置づけとしては基礎医学に類別される。病理学の対象は人体の病気であるため、基礎医学から臨床医学へお掛け橋的役割をなしている。授業では解剖学や生理学の知識を基礎にして、疾病における人体の構造および機能の異常について学び、その知識を臨床医学の理解および医学の実践に役立てることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	病理学の概要・病因論が理解できる	講義	テキスト「病理学」の病理学の概要・病因論を読んでくる
2	退行性病変と代謝異常が理解できる	講義	テキストの退行性病変と代謝異常を読んでくる
3	進行性病変と循環障害が理解できる	講義	テキストの進行性病変と循環障害を読んでくる
4	免疫と炎症・感染症が理解できる	講義	テキストの免疫と炎症・感染症を読んでくる
5	腫瘍と放射線障害が理解できる	講義	テキストの腫瘍と放射線障害を読んでくる
6	老化と先天性異常・奇形が理解できる	講義	テキストの老化と先天性異常・奇形を読んでくる
7	循環器系が理解できる	講義	テキストの循環器系を読んでくる
8	呼吸器系が理解できる	講義	テキストの呼吸器系を読んでくる
9	消化器系が理解できる	講義	テキストの消化器系を読んでくる
10	神経系が理解できる	講義	テキストの神経系を読んでくる
11	運動器系が理解できる	講義	テキストの運動器系を読んでくる
12	泌尿器系と生殖器系が理解できる	講義	テキストの泌尿器系と生殖器系を読んでくる
13	内分泌系と造血器系が理解できる	講義	テキストの内分泌系と造血器系を読んでくる
14	皮膚と感覚器系が理解できる	講義	テキストの皮膚と感覚器系を読んでくる
15	終講試験、まとめ、解説	試験	

■受講上の注意

私語はしないこと、講義の予習をしてくること、
忘れ物の無いようにし、主体的に集中して講義に臨むこと

■成績評価の方法

出席状況・受講態度・終講試験などにより総合的に評価する

■テキスト参考書など

岩田隆子 監修:わかりやすい病理学 改訂第5版, 南江堂

■備考

講義資料については適宜配布する

薬理学

講師:石田 和久

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

薬に関する情報は、市販の情報誌やテレビ番組、さらにはインターネットや携帯端末などにより容易かつ瞬時に入手できる。そのような環境の中で、必要な情報を正確に把握し、理解できることが大切である。今回の薬理学では、臨床で遭遇する機会 の多い疾患について、臓器毎の生理機能や構造を学び、病態や治療薬の作用機序、 副作用に対する理解を深める。また、処方箋をもとに疾患名や症状を推測できる力を養う。さらに、 身体機能を図解化して説明できるよう、描写方法も習得する。講義の終了時には各種の病態や薬物療法を理論的に説明できることを目標とし、その 成果を筆記試験並びに受講姿勢から総合的に評価する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	①実際の臨床現場で、処 方薬の目的や効果を把握 するために、検索方法や 添付文書の見方を理解 し、疾患名や状態を説明 できるようにする。 ②薬の身体機能に与える 影響を認識するために、事例を振り返り、薬の影 響を説明できるようにす る。 ③中枢系に作用する薬を 一覧して分類できるよ う、まずは、各部位を模 式的に理解し、神経回路 を自身で書けるようにする。	講義 GW	・第1回薬理学から実施 ・インターネット活用 ・図解化演習 ・習得知識確認の小テストの実施
2	脳の機能的異常と精神疾 患に対応するために、心 身症、うつ病、パーキン ソン病、統合失調症等 の病態を脳の伝達物質の 観点から理解し、向精神 薬の作用機序と副作用を説明できるようにする。	講義・演習	・第2回薬理学を一読しておく ・図解化演習 ・習得知識確認の小テストの実施
3	認知症に対応するため に、病態を脳の障害部位 から理解し、薬物療法と 作用機序、副作用を説明 できるようにする。	講義・演習	・第3回薬理学を一読しておく ・図解化演習 ・習得知識確認の小テストの実施
4	循環器系の疾患に対応するために、心不全、不整脈、狭心症、高血圧、血栓性疾患等の病態を心臓および循環器系を図解化して理解し、治療薬の種類とと作用機序、副作用を説明できるようにする。	講義・演習	・第4回薬理学を一読しておく ・図解化演習 ・習得知識確認の小テストの実施
5	①循環器系の疾患に対応するために、細胞の機能、電解質の役割を理解し、高血糖、腎機能低下等の影響を図解化して理解し、注射剤も含め治療薬の種類と作用機序、副作用を説明できるようにする。サプリメントについても紹介する。 ②高齢者に多い泌尿器障害や排便困難、消化管障害等、日々の医療で遭遇する症状に対応するために、それらの病態を発生要因から理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を説明できるようにする。	講義・演習	・第5回薬理学を一読しておく ・ドラッグストア等で事前にサプリメントを手に取り成分名等をみてみる ・インターネット活用 ・図解化演習 ・習得知識確認の小テストの実施
6	①骨粗鬆症に対応するために、骨芽細胞や破骨細胞の機能とモデリングを理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を説明できるようにする。 ②免疫系の疾患に対応するために、生体防御機構を理解し、アレルギー用剤、気管支喘息用剤、抗菌剤・抗ウィルス剤、関節リウマチ用剤の作用機序と副作用を説明できるようにする。また、最近のインフルエンザ用剤、抗がん剤についても理解を深める。	講義・演習	・第6回薬理学を一読しておく ・図解化演習 ・習得知識確認の小テストの実施
7	①患者の訴える「痛み」に対応するために、痛みの種類と伝達経路を図解化して理解し、今回までに学んだ薬の組み合わせ効果、さらにはオピオイド・非オピオイド鎮痛薬等について説明できるようにする。 併せて、がんﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝや緩和医療に対応しやすくするために、学んだ知識を活かすことができるよう知識を再確認する。	講義・演習	・第7回薬理学を一読しておく ・図解化演習 ・習得知識確認の小テストの実施
8	終講試験とまとめ	筆記試験	講義に使用した医薬品集は利用可

■受講上の注意

私語は慎む。なお、講義中の質問および終了後の質問は積極的に行ってほしい・講義の予習とともに学んだ方法は実践してみること。講義で使用するオリジナルテキストを忘れないようにする。また、図解し演習する機会もあるので、各自で記録可能なノートなどを準備する。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

終講試験(90%)・授業への参加態度(10%)により総合的に評価する。試験は筆記にて行い、その結果を最重要視するが、質問等を通した講義への積極的な坂など受講態度なども加味する。100点満点として60点未満に再試験を実施する。

■テキスト参考書など

テキスト:過去5年間の国家試験問題をもとに作成したオリジナルテキストおよび医薬品集を利用。各講義ごとに要点をまとめ、知識を確認できる小テストも実施する。
参考書:ビジュアルノート(Medic Media)、図解薬理学(鍋島・井上編集;南山堂)等

■備考

・上記のオリジナルテキストおよび医薬品集は事前配布する。
・講義にはインターネット環境のパソコン1台とプロジェクターを準備。インターネットの　検索サイト(pmda、薬価2017　他)の閲覧およびテキストを投影する。
・App store・Android無料アプリ「ヤクチエ添付文書」は講義中に説明する。

栄養学

講師：川元 真由美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

リハビリテーションを実施するためには評価を行い、それに見合った訓練を実施する。しかし、リハビリテーションは対象者の栄養状態により効果が左右される、という認識が未だ薄い現状である。
本講義ではリハビリテーションを実施する上で押さえておくべき栄養の知識を習得し、臨床現場において栄養管理から視野に入れたリハビリテーションを行うことができる言語聴覚士となることを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーションと栄養の関係性を理解する	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	栄養学の基礎について理解を深める①（栄養法）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	栄養学の基礎について理解を深める②（低栄養）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	栄養学の基礎について理解を深める③（栄養素）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	栄養学の基礎について理解を深める④（栄養管理）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	リハビリテーション栄養について理解する①（運動栄養学）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	リハビリテーション栄養について理解する②（栄養状態悪化時のリハビリテーション）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	栄養評価について概要を理解する	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	栄養評価について理解を深める（体験）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	NSTにおけるSTの役割について理解を深める	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	疾患別リハビリテーション栄養について理解する①（廃用症候群、脳卒中、パーキンソン）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	疾患別リハビリテーション栄養について理解する②（癌、誤嚥性肺炎）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	疾患別リハビリテーション栄養について理解する③（褥瘡、慢性閉塞性肺疾患等）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	講義のまとめ	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

提出物・グループ活動等（30点）、単位認定試験（70点）から総合的に判断し60点／100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

若林秀隆：PT・OT・STのためのリハビリテーション栄養 栄養ケアがリハを変える，第二版
適宜資料を配布する

■備考

内科学

講師：山下 佐英

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

内科学は、すべての臨床医学の基本であり、疾病の原因・誘因、症状、診断、治療、予防について、系統的に、しかも論理的にStep by step、一貫性をもって学ぶ必要がある。的確な診断を得るためには、各種の臨床検査を行い、患者の症状、所見を正確に把握することが求められる。そのためには、いかにして内科学を効率的にマスターしていくか、思考のプロセスを重視した形で学ぶ必要がある。そして、それらをそのつどまとめてプロトコールやアブストラクトとして残し、来るべき国試対策として備えておくことである。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	診療の手順が理解できる	講義	テキスト「PT・OT・STのための一般臨床医学」の診療の手順を読んでくる
2	臨床検査と治療法が理解できる	講義	テキストの臨床検査と治療法を読んでくる
3	新しい医療システム、新しい医学と医療が理解できる	講義	テキストの新しい医療システム、新しい医学と医療を読んでくる
4	感染症が理解できる	講義	テキストの感染症を読んでくる
5	循環器疾患が理解できる	講義	テキストの循環器疾患を読んでくる
6	呼吸器疾患が理解できる	講義	テキストの呼吸器疾患を読んでくる
7	消化管・腹膜疾患が理解できる	講義	テキストの消化管・腹膜疾患を読んでくる
8	肝・胆道・膵疾患が理解できる	講義	テキストの肝・胆道・膵疾患を読んでくる
9	腎・尿路系疾患が理解できる	講義	テキストの腎・尿路系疾患を読んでくる
10	内分泌・代謝疾患が理解できる	講義	テキストの内分泌・代謝疾患を読んでくる
11	自己免疫・アレルギー疾患が理解できる	講義	テキストの自己免疫・アレルギー疾患を読んでくる
12	血液疾患が理解できる	講義	テキストの血液疾患を読んでくる
13	中毒・環境要因による疾患が理解できる	講義	テキストの中毒・環境要因による疾患を読んでくる
14	脳神経・筋疾患が理解できる	講義	テキストの脳神経・筋疾患を読んでくる
15	終講試験、まとめ、解説	試験	

■受講上の注意

私語はしないこと、講義の予習をしてくること、忘れ物の無いようにし、主体的に集中して講義に臨むこと

■成績評価の方法

出席状況・受講態度・終講試験などにより総合的に評価する

■テキスト参考書など

寺野 彰 総編：シンプル内科学，南江堂

■備考

講義資料については適宜配布する

医科学歯科学総論

講師:山下 佐英

単位数:2単位	時間数:45時間	授業学年:3学年
必修選択:必修		

■科目目標

ST学を学ぶに当たっては、まず人体の正常構造や機能はもとより、生体の病態について学ぶ病理学、さらには Emargency における救命救急処置法あるいは疾患を有する患者の画像診断法・老年医学の立場から頻度の高い疾患の理解、はたまた口腔の構音異常の成り立ちと外科的治療法など医学的視点および歯科学的視点から総括的に学ぶことのニーズを捉えて、総合的診断と治療法を学ぶことを目的とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	救命救急医学	座学	
2	一次救命救急と二次救命救急すなわち心肺蘇生法(AEDの使い方を含む)と脳死判定規準について学ぶ。	座学	
3	一次救命救急と二次救命救急すなわち心肺蘇生法(AEDの使い方を含む)と脳死判定規準について学ぶ。	座学	
4	画像を通して生体の異常を把握する	座学	
5	頭頸部、脳、胸腔部、骨盤部、四肢等の診断法とX線解剖学の意義と特徴	座学	
6	X線発生法、撮影法すなわち単純X線撮影、断層撮影、臓器造影法(血管造影・リンパ管造影を含む)、を学ぶ。	座学	
7	CT-scan法、MRI撮影、デジタルX線撮影等について学ぶ。	座学	
8	パノラマ撮影、咬合法撮影、Radio-Isotopeを用いたシンチグラフィー等について学ぶ。	座学	
9	高齢者に多い症状を理解する。	座学	
10	高齢者に多い疾患についてその対処法を学ぶ。	座学	
11	加齢に伴う老化について理解する。	座学	
12	加齢に伴った生理機能低下について理解する。	座学	
13	加齢に伴う老化と運動機能の低下について学習する。	座学	
14	加齢に伴う精神心理面の変化について理解できる	座学	
15	高齢者に多い疾患(循環器、呼吸器、消化器)について学ぶ。	座学	
16	高齢者に多い疾患(骨・運動器、神経)について学ぶ。	座学	
17	高齢者に多い疾患(内分泌、代謝、血液、免疫、腎・泌尿器)を学ぶ 高齢者に多い疾患(皮膚、口腔、耳鼻咽喉、眼、感染症)について学ぶ。	座学	
18	顎顔面口腔手術学の概要を理解する	座学	
19	口唇口蓋形成術、咽頭弁移植術を理解する	座学	
20	顎裂部骨移植術を理解する	座学	
21	切除即時再建術、耳介軟骨採取術、鼻翼形成術を学習する	座学	

22	肋骨・腸骨採取術・移植術、遊離皮弁移植術、大胸筋・腹直筋・前腕皮弁移植術および顎顔面口腔の機能障害に対する手術法について学ぶ。	座学
23	単位認定試験・まとめ	座学

■受講上の注意

■成績評価の方法

筆記試験

■テキスト参考書など

ST学生のためになる救命救急医学, 鹿児島医療技術専門学校前校長 山下佐英編
ST学生のためになる画像診断学（X線解剖学）, 鹿児島医療技術専門学校前校長 山下佐英編
顎顔面口腔手術学図説, 鹿児島大学名誉教授 山下佐英, 医歯薬出版
老年学　第3版, 大内尉義編, 医学書院

■備考

小児科学

講師:要 千草

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

・小児の正常な発達について説明できる
・小児の疾患について学び、基礎疾患や合併症のある患児に対する配慮を考える。
・将来訓練計画を立てる際に、基礎疾患や合併症を配慮し、家族への助言ができるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	小児の発達などについて理解できる。	講義	テキスト第1章の予習
2	小児保健、栄養、予防接種、痙攣などの救急処置について理解できる。	講義	テキスト第1・2章の予習
3	新生児や未熟児の特徴などについて理解できる	講義	テキスト第3章の予習
4	新生児や未熟児の中枢神経疾患、遺伝と先天異常について理解できる	講義	テキスト第3・4章の予習
5	先天代謝異常の発生機序について理解できる。	講義	テキスト第4章の予習
6	主な感染症の症状と伝染性について理解できる。	講義	テキスト第8章の予習
7	先天性心疾患と川崎病について理解できる	講義	テキスト第6章の予習
8	主な呼吸器疾患と免疫・アレルギーについて理解できる	講義	テキスト第7・12章の予習
9	自己免疫疾患、主な消化器疾患、下垂体・甲状腺の内分泌疾患について理解できる	講義	テキスト第9・10・12章の予習
10	副腎・性腺の内分泌疾患、糖尿病、赤血球・白血球の血液疾患について理解できる	講義	テキスト第10・11章の予習
11	出血性疾患、主な腎・泌尿器系疾患、腫瘍性疾患について理解できる。	講義	テキスト第11・13・14章の予習
12	中枢神経系の発生、中枢神経疾患について理解できる	講義	テキスト第5章の予習
13	てんかんの分類、発達遅滞を生じる疾患について理解できる	講義	テキスト第5章の予習
14	末梢神経疾患、筋・骨系疾患、心身症、児童虐待などについて理解できる	講義	テキスト第5・15章の予習
15	小児の主な眼科・耳鼻科的疾患、重症心身障害児の特徴について理解できる	講義	テキスト第16・17章の予習　課題レポートの提出

■受講上の注意

・私語はしない
・予習としてテキストを一読してくる
・忘れ物の無いようにする

■成績評価の方法

試験100%　再試ではレポートの評価点を加味する。

■テキスト参考書など

標準理学療法学・作業療法学　小児科学　第5版（医学書院）

■備考

資料プリントはレジュメとして毎回事前に配布する。

精神医学

講師:岡田 洋一

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

言語聴覚士として精神疾患、精神障害の内容と治療法、また援助の方法についてリハビリテーションの視点を持ちながら理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	脳科学から見たこころの科学・精神分析学からみた心のモデルについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
2	精神医学の概念、精神科リハビリテーションについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
3	精神科リハビリテーションのプロセスと技法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
4	うつ病、双極性障害、トラウマとPTSDについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
5	境界性人格障害について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
6	統合失調症について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
7	アルコール依存症、嗜好問題について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
8	試験により領域学習の確認を行う。	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

試験

■テキスト参考書など

リチャード・W・ロウキマ:すぐ引けるすぐわかる　精神医学最新ガイド，星和書店

■備考

リハビリテーション医学

講師：山中 弘毅

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学の基礎的な知識を身に付ける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学のとらえ方	講義	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝへの取り組み方法を知る。レポート提出、小テストの実施。
2	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝと連携する業務	講義	レポート提出、小テストの実施
3	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝでの身体所見・評価法	講義	レポート提出、小テスト実施
4	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学の診療手順	講義	レポート提出、小テスト実施
5	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学の治療手技	講義	レポート提出、小テスト実施
6	関節可動域障害	講義	レポート提出、小テスト実施
7	運動麻痺	講義	レポート提出、小テスト実施
8	筋力低下	講義	レポート提出、小テスト実施
9	協調性障害	講義	レポート提出、小テスト実施
10	脳卒中ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ総論	講義	レポート提出、小テスト実施
11	脳卒中ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ各論	講義	レポート提出、小テスト実施
12	神経変性疾患のﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ	講義	レポート提出、小テスト実施
13	廃用症候群へのﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ	講義	レポート提出、小テスト実施
14	高齢者へのﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ	講義	レポート提出、小テスト実施
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	14回分のレポート提出を完了済みの者に受験資格あり

■受講上の注意

課題レポートを講義前までに提出する

■成績評価の方法

・毎回の課題レポートの提出及び小テストを行う
・終講試験の結果に、レポート評価と小テスト得点を加える

■テキスト参考書など

ビジュアルブック 「ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学」

■備考

総合評価は試験60%、レポート20%、小テスト20%から行う。（レポートを全く提出しなければ、評価の対象外とする）

耳鼻咽喉科学

講師:浅野 庄三

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

耳、鼻、口腔、咽頭、気管、食道の解剖と生理機能を理解し、各疾患を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	耳科学　解剖・生理	講義	解剖と生理機能を理解すること
2	耳科学　聴力障害　各論	講義	解剖と生理機能を理解すること
3	耳科学　各論　めまい	講義	解剖と生理機能を理解すること
4	鼻科学　解剖・生理　鼻疾患	講義	解剖と生理機能を理解すること
5	口腔咽頭科学　解剖・生理	講義	解剖と生理機能を理解すること
6	喉頭科学　解剖・生理　音声障害	講義	解剖と生理機能を理解すること
7	気管食道科学　解剖・生理　嚥下障害	講義	解剖と生理機能を理解すること
8	試験		

■受講上の注意

■成績評価の方法

終講後試験をおこなう

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第2版　（医学書院）

■備考

臨床神経学

講師：有薗 良一、平原 大助、田中 洋、小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士として必要な神経内科学の知識を身につけ、疾患や所見の理解、画像の見方について学ぶ。また、病態を理解し、運動障害や認知機能障害を呈した患者に対する言語聴覚士の関わり方について学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	子どもの発達の特徴を理解できる	講義	復習を中心に行う
2	ことばの遅れについて理解する	講義	復習と関連付けを行う
3	障害と障害児・療育について理解する	講義	配布資料を確認する
4	発達障害について理解する	講義	配布資料を確認する
5	先天異常総論・各論（遺伝子論）について理解する	講義	配布資料を確認する
6	各論（染色体異常、胎芽病・胎児病、遺伝カウンセリング）について理解する	講義	配布資料を確認する
7	エコーについての理解を深める	講義・GW	超音波の特性を予習しておく。
8	CTによる画像検査を理解する	講義・GW	放射線の基礎的知識を予習しておく。
9	MRIによる画像検査の概要を知る	講義・GW	磁気共鳴の基本的な考え方を学習しておく。
10	画像読影のポイントを理解する	講義・GW	講義の資料を復習する。
11	中枢性病変による神経疾患について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
12	末梢性病変による神経疾患について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
13	小脳性病変による神経疾患について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
14	錐体外路病変による神経疾患について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
15	終講試験、まとめ、解説	試験	

■受講上の注意

内部教員（小牧）担当講義については、言語聴覚士が臨床にて遭遇する機会の多い疾患を中心に講義を行う。

■成績評価の方法

試験

■テキスト参考書など

■備考

講義資料については適宜配布する

形成外科学

講師:髙木 信介、徳永 弘樹

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

形成外科全体の理解と器質性構音障害について理解を深める。また、特に口蓋裂における治療・訓練に対するアプローチを理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	形成外科学の概要、形成外科の基本的な手術法について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
2	口唇口蓋裂の治療、その他の先天異常の治療について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
3	腫瘍に対する治療、顔面・四肢外傷、美容について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
4	形成外科領域における言語療法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
5	口唇口蓋裂の言語的特徴について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
6	口唇口蓋裂の言語評価について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
7	口唇口蓋裂の言語訓練について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
8	試験により領域学習の確認を行う。	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

試験

■テキスト参考書など

配付資料

■備考

看護学

講師：濱川 孝二

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

医療現場における看護師の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として、チーム医療の推進のため、どのように連携や協働ができるか考えることができる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	看護の概念、本質を多様の定義を通して学ぶ	講義、GW	看護についての自己のイメージや考えを述べる
2	健康の概念を通して、人間における健康の意義について理解できる	講義、DVD、GW	看護の目的である健康とは何かについて討議し、健康の意義について考える
3	看護の機能と役割について理解する	講義、DVD、GW	看護師の業務について学び、対象への主な関わりについて考える
4	看護における倫理的行動について理解できる	講義、GW	事例検討において、看護現場における倫理的配慮について考える
5	チーム医療における看護師の役割について考えることができる	講義、GW	事例を通して、チーム医療の必要性について考える
6	看護の実践方法について理解できる（バイタルサイン測定法・吸引法・フィジカルアセスメント他）	講義、演習	看護の実践方法について学び、自己の実践力の向上に努める
7	看護の実践方法について理解できる（バイタルサイン測定法・吸引法・フィジカルアセスメント他）	講義、演習	看護の実践方法について学び、自己の実践力の向上に努める
8	終講試験・まとめ	筆記試験	

■受講上の注意

看護の内容や役割について理解を深める科目です。自己の目指す職業との比較をしながら考えて、理解を深めてください

■成績評価の方法

筆記試験　90点
平常点　10点（出席状況・授業態度など）

■テキスト参考書など

参考：看護学概論　医学書院
　　看護倫理　学研
DVD：生まれてくれてありがとう　メディアパーク

■備考

講義資料については、適宜配布する

運動療法

講師：冨山 翔太

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

運動を行うことによりどの様な生体反応が得られるのかを理解し、運動療法の理論的背景と実施方法について学び、個々に合わせた介助方法を習得することを目標とする。また医療職としての基本的な運動および動作の介助法を講義・実技を通して学び、構音・嚥下障害といった運動障害に起因する言語聴覚障害の理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	運動療法とは何か学ぶ	講義	実習着持参
2	動作観察・分析	演習	骨・筋について復習
3	支持基底面について	講義・演習	骨・筋について復習
4	座位姿勢による運動の違いについて	講義・演習	骨・筋について復習
5	車椅子介助、移乗動作実技	演習	骨・筋について復習
6	姿勢と構音・嚥下について①	演習	dysarthria・嚥下障害の復習
7	姿勢と構音・嚥下について②	演習	dysarthria・嚥下障害の復習
8	運動負荷における禁忌事項について	講義	循環器系の復習

■受講上の注意

人体の骨・筋肉について復習をしておくこと。基本的に実技形式で実施する為、実習着を忘れないこと。

■成績評価の方法

評価対象：定期試験、実技試験　　評価基準：定期試験50%、実技試験50%とする。

■テキスト参考書など

随時配布する

■備考

臨床歯科学

講師：堀川 憲子

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

口腔・顎・顔面の構造と機能、疾患を学ぶことによって、口腔機能障害を持った患者の身体的・精神的。情緒的特徴を把握し、個別的ニーズに応じて社会復帰の援助ができる言語聴覚士の育成を目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	歯・口腔・顎・顔面の構造機能を理解する	講義	歯・歯周組織の形態と構造を予習する
2	口腔・顎・顔面の形態と構造を理解する	講義	口腔・顎・顔面の形態と構造を予習する
3	歯・歯周組織の発生と発育を理解する	講義	歯・歯周組織の発生と発育を予習する
4	①咀嚼機能を理解する	講義	①咀嚼機能正常異常を理解する
5	②摂食嚥下機能を理解する	講義	②摂食嚥下機能正常異常を理解する
6	診察のポイント、感染予防を理解する	講義	診察のポイント、感染予防を予習する
7	①歯牙疾患の種類と症状を理解する	講義	①歯牙疾患の種類と症状を予習する
8	②歯の萌出・数・形態異常を理解する	講義	②歯の萌出・数・形態異常を予習する
9	歯周組織疾患の種類と症状を理解する	講義	歯周組織疾患の種類と症状を予習する
10	口腔ケアの意義、清掃方法を理解する	講義	口腔ケアの意義、清掃方法を実践する
11	全身・局所的診査の意義と方法を理解する	講義	全身・局所的診査の意義と方法を実践する
12	口腔内外機能検査と診査法を理解する	講義	口腔内外機能検査と診査法を実践する
13	咀嚼障害の発症・症状・治療法を理解する	講義	咀嚼障害の発症・症状・治療法を予習する
14	嚥下障害の発症・症状・治療法を理解する	講義	嚥下障害の発症・症状・治療法を予習する
15	終講試験およびまとめ	試験	

■受講上の注意

参考テキストの項目を予習し授業中に理解する
傾聴する態度を身に付ける

■成績評価の方法

「平常点10点、筆記試験90点」で評価し60点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学　道健一　編集（医歯薬出版）

■備考

資料プリントは適宜配布する

口腔外科学

講師：杉原 一正

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

構音、咀嚼、摂食嚥下の障害と関係のある口腔外科的疾患（口唇裂口蓋裂、顎変形症、口腔腫瘍、嚢胞、顎骨骨折など）について具体的に述べることができ、臨床の現場で言語聴覚士として治療のエビデンスに活用する能力を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	口腔領域の先天異常（口唇裂、口蓋裂など）の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
2	口腔領域の外傷（顎骨骨折など）の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
3	口腔領域の炎症（歯性炎症）、感染症の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
4	口腔領域の嚢胞（顎骨内および軟組織内に発生する）の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
5	口腔領域の良性腫瘍（歯原性および非歯原性良性腫瘍）の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
6	口腔領域の悪性腫瘍の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
7	口腔粘膜疾患の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
8	唾液腺疾患の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
9	顎関節疾患、神経疾患の特徴と治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
10	咀嚼、摂食嚥下、構音障害に対する歯科医学的治療法について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
11	咀嚼障害の特徴、評価、治療について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
12	摂食嚥下障害のメカニズム、検査、治療について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
13	器質性構音障害、口腔疾患による構音障害の特徴について説明できる	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
14	中枢性疾患、加齢による口腔機能障害について説明出来る	講義・GW	小テストの実施 課題レポートの提出
15	終講試験とまとめ		小テストの復習をすること

■受講上の注意

講義の予習（前のって教科書を読んでおく）をして、主体的授業に望むこと

■成績評価の方法

終講試験(60%)、小テスト(20%)、課題レポート(10%)、授業への参加態度(10%)

■テキスト参考書など

『言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学—器質性構音障害』第2版
医歯薬出版

■備考

資料プリントは毎回配布する

呼吸発声発語系の構造・機能・病態

講師：戌亥 啓一

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

【一般目標】

呼吸、発話メカニズムについて，医学用語を用いて正確に説明することができる。

【到達目標】

・呼吸、発声発語に関わる器官について説明できる。
・呼吸、発声発語に関わる神経支配とコントロールについて説明できる。
・呼吸、発声発語器官の病態について説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	呼吸について意識する	講義	まずは自身の呼吸について意識する
2	呼吸の働き・役割を知る	講義	図表・専門用語を逐一調べる習慣を持つ
3	呼吸器の概要・形を知る	講義	図表・専門用語を逐一調べる習慣を持つ
4	肺・気管の細部を知る	講義	図表・専門用語を逐一調べる習慣を持つ
5	喉頭の役割と細部を知る1）	講義	解剖に関わる書籍を持参する
6	喉頭の役割と細部を知る2）	講義	解剖に関わる書籍を持参する
7	喉頭の役割と細部を知る3）	講義	喉頭構造についての提出物あり
8	換気、呼吸の調節機構を理解する	講義	ポイントを提示するのでおさえる
9	口腔・咽頭・鼻腔の役割と細部を知る1）	講義	解剖に関わる書籍を持参する
10	口腔・咽頭・鼻腔の役割と細部を知る2）	講義	解剖に関わる書籍を持参する
11	口腔・咽頭・鼻腔の役割と細部を知る3）	講義	口腔・咽頭・鼻腔についての提出物あり
12	発声発語の調整について理解する	講義	ポイントを提示するのでおさえる
13	呼吸・発声発語データを知る1）	講義	ポイントを提示するのでおさえる
14	呼吸・発声発語データを知る2）	講義	病態との関連まで触れる
15	試験・解説		講義内容全般より重要度の高いものを出題する

■受講上の注意

＊授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

試験、提出物

■テキスト参考書など

配付資料、関連解剖書籍

■備考

聴覚系の構造・機能・病態

講師：松田 悠佑

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

聴覚器の機能構造を知るとともに難聴の種類からみた病態を理解する

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士と聴こえ	講義	難聴を理解する
2	聴覚器系の構造①外耳と中耳	講義	伝音系の構造・機能を理解する
3	聴覚器系の構造①外耳と中耳	講義	
4	聴覚器系の構造②内耳	講義	感音系の構造・機能を理解する
5	聴覚器系の構造②内耳	講義	
6	聴覚器系の構造③後迷路	講義	聴覚伝導路とその機能を理解する
7	聴覚器系の構造③後迷路	講義	
8	聴覚器の機能④その他の機能	講義	聴覚に関わる機能を理解する
9	難聴の種類	講義	難聴の種類を理解する
10	伝音難聴の病態	講義	疾患を理解する
11	感音難聴の病態	講義	疾患を理解する
12	その他の病態	講義	疾患を理解する
13	総括	講義	講義内容の総復習
14	総括	講義	講義内容の総復習
15	定期試験	ペーパー	講義内容の総復習

■受講上の注意

なし

■成績評価の方法

試験（100%）

■テキスト参考書など

資料を配布する

■備考

なし

神経系の構造・機能・病態

講師：小牧祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士として必要な神経の構造・機能及び病態を中心に理解し、言語聴覚障害領域における専門内容を理解する為の基礎を築く。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経細胞の発生や機能について理解する。	講義	特になし
2	神経伝達物質の作用や機序について理解する。	講義	特になし
3	脳血管の還流領域、脳幹、小脳の働きについて大まかに理解する。	講義	特になし
4	神経系に関する各領域について能動的学習を行い、理解を深める。①	TBL	班ごとに必要となる参考書等の資料を準備すること。
5	神経系に関する各領域について能動的学習を行い、理解を深める。②	TBL	班ごとに必要となる参考書等の資料を準備すること。
6	神経系に関する各領域について能動的学習を行い、理解を深める。③	TBL	班ごとに必要となる参考書等の資料を準備すること。
7	意識障害、脳ヘルニアの概要、評価、対応を学ぶ。	講義・TBL	講義とTBLを適宜切り替えて行う。
8	言語障害・認知機能障害の概要を理解し、評価、対応を学ぶ。	講義・TBL	講義とTBLを適宜切り替えて行う。
9	運動麻痺・感覚障害の概要を理解し、病態を学ぶ。	講義・TBL	講義とTBLを適宜切り替えて行う。
10	脳神経症状の概要を理解し、症状、評価法を学ぶ。	講義・TBL	講義とTBLを適宜切り替えて行う。
11	嚥下障害の概要を理解し、症状を学ぶ。 排尿障害・自律神経障害を理解し、病態を把握する。 小脳症状について理解する。	講義・TBL	講義とTBLを適宜切り替えて行う。
12	髄液循環障害・脳血管障害の概要を理解し、評価、対応を学ぶ。	講義・TBL	講義とTBLを適宜切り替えて行う。
13	まとめ	講義	特になし。
14	確認試験	講義	最終試験前に習得知識の確認の試験を行う。（成績評価には含めない）
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

本講義は班を形成し、班ごとにそれぞれ異なる内容について学習を行い、学習した内容を発表する形式を用いる。
TBL：能動的学習を前提とした少人数チームでの学習教育

■成績評価の方法

単位認定試験　100%

■テキスト参考書など

病気が見える vol.7 第2版　編集：医療情報科学研究所　発行：メディックメディア

■備考

特になし

心理演習

講師：山下 協子

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

「こころ」の問題は、特定の人たちの問題ではなく、私たちすべての人間の人生や生活に密接に関係している。本講義では、「こころ」の問題に興味をもち、取り組む姿勢を自分自身で考えることができるようになるために、様々な状況での感覚を体験する体験学習を交えながら、基礎となる心理学および臨床心理学について概説していく。心理学および臨床心理学の基礎的な知識を習得し、心理学の用語や療法等について説明できるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	心理学・臨床心理学および臨床心理士とは何かを知る	講義・GW	特になし
2	「心理学の歴史と方法」「心の発達」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
3	「感覚と知覚」「学習」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
4	「記憶と思考」「動機づけと情動」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
5	「性格」「対人関係と集団」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
6	「精神分析」「分析心理学」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
7	「クライエント中心療法」「行動療法」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
8	「心理臨床に必要な精神医学の知識」「心理臨床に必要な心身医学の知識」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
9	「発達検査および知能検査」「質問紙法検査」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
10	「投影法検査」「心理療法の技法」について知る	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
11	統合失調症について知る（映画鑑賞①）	講義	統合失調症について復習しておく。
12	統合失調症について知る（映画鑑賞②）	講義・GW	統合失調症について復習しておく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。映画の感想レポートを課す
13	「カウンセリングとは何か」について知る	講義・GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
14	「傾聴とは何か」について知る	講義・GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
15	終講試験およびまとめ		事前に配布する問題集を参考に復習しておく。

■受講上の注意

講義はテキストに沿って進める。当日レジメを配布するが、事前に該当する章を読んで臨んでほしい。体験を目的とする学習材料をほぼ各回で用意する予定であるが、私語などせず真摯に取り組み、グループワークの際には積極的に意見を述べてほしい。

■成績評価の方法

平常点10%、レポート10%、試験80%により総合的に評価する。

■テキスト参考書など

・テキスト：『基礎から学ぶ心理学・臨床心理学』山　祐嗣・山口　素子・小林　知博
　　編 著；北大路書房
・授業での配布資料

■備考

講義用のレジメや資料は適宜配布する。

臨床心理学

講師：岩元 正知

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

「臨床」とは「病み、悩み、障害をもつ人間に対して、実際に、その状態像を把握し、治療すること」であり、「臨床心理」という言葉は、「心理学を臨床的に応用する」と考えられる。多くの人間は、心の内に悩みや迷い、葛藤を抱えており、「臨床心理学」はそのような状態像の解決を援助する学問である。
ところで言語聴覚士国家試験の「臨床心理学」の過去出題範囲は、基礎心理学に始まり、心理統計、心理査定、精神症状、心理面接および心理療法、さらに出題回数は少ないが地域援助と多岐にわたっている。そこで本講義では出題頻度の高い心理査定、精神症状（神経発達症群を除く）、心理面接および心理療法を中心に展開し、国家試験で問われる知識を身に付けていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床心理の基本的概念および機械に写ることのない「人間の心」とは何か…について理解することができる。	講義	ミニ心理ゲーム「絶対に許せないのは誰？」の実施。
2	「パーソナリティ理論（性格類型論、性格特性論）」について理解することができる。	講義	ST国試に頻出されている「パーソナリティ理論」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
3	「人格理論（質問紙法、作業検査法、投影法など）」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「人格検査」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
4	無意識という概念を提唱したフロイトの「精神分析」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「精神分析（的心理療法）」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
5	ロジャーズの提唱した「クライエント（来談者）中心療法」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「クライエント中心療法」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
6	「パニック症」を含む心の病の一つ「不安症」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
7	若者の心の病の一つ「強迫症」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
8	精神病の一つ「統合失調症スペクトラム障害」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
9	「境界性パーソナリティ障害」についての理解を深める。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
10	「抑うつ障害群」について。特に、いわゆる「うつ病」についての知識を理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
11	「双極性障害および関連障害群」について。特に、「双極性障害（躁うつ病）」についての知識や「うつ病」との違いを理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
12	「家族の病理」と呼ばれる「摂食障害」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
13	学習理論に基づく心理療法「行動療法」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
14	「認知療法」「認知行動療法」について、国試に対応できる知識を理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと

■受講上の注意

試験（70%）授業中のレポート（20%）授業への参加態度（10%）により相互的に評価する。

■成績評価の方法

上島国利（2017）：「最新図解 やさしくわかる精神医学」、ナツメ社

■テキスト参考書など

毎回、講義資料を配付する。

■備考

生涯発達心理

講師：大薗 博記

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

乳幼児期から青年期、高齢期に至るまでの生涯発達についての基礎知識を習得するとともに、心と行動の発達過程について客観的・科学的に理解する視点を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション：発達とは	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
2	発達段階	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
3	遺伝と環境の影響	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
4	運動・認知と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
5	感情・動機づけと発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
6	言語と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
7	人格・知能と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
8	自己と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
9	親子関係と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
10	社会性と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
11	発達診断と発達障害	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
12	青年期と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
13	成人期・高齢期と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
14	高齢期の発達と障害	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
15	終講試験およびまとめ	講義・討論	

■受講上の注意

毎回、討論を行う予定のため、積極的・主体的に参加すること。

■成績評価の方法

終講試験100%

■テキスト参考書など

教科書：なし
参考書：しっかり学べる発達心理学，福村出版。手にとるように発達心理学がわかる本，かんき出版。その他、適宜紹介する。

■備考

資料プリントは適宜配布する。

発達心理演習

講師：有倉 巳幸

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

人の発達が生涯を通して続くという近年の視点から見れば，出生から死までを発達プロセスとしてとらえ，発達段階ごとの特徴や課題について学ぶことは，ヒューマンサービスを職業とする専門職にとって意義あることであろう。本授業では，LTD（話し合いによる学習）法を取り入れ，青年期以降の発達および発達の課題について学ぶだけでなく，話し合いを通して，コミュニケーションスキルを身につけることも目標として位置づける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション：発達とは	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
2	発達段階	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
3	遺伝と環境の影響	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
4	運動・認知と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
5	感情・動機づけと発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
6	言語と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
7	人格・知能と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
8	自己と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
9	親子関係と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
10	社会性と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
11	発達診断と発達障害	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
12	青年期と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
13	成人期・高齢期と発達	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
14	高齢期の発達と障害	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
15	終講試験およびまとめ	講義・討論	

■受講上の注意

■成績評価の方法

■テキスト参考書など

■備考

学習・認知心理学

講師：假屋園 明彦

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

学習，知覚，知能，測定といった学習面に関する基本的な用語，現象，理論について理解する。これらの領域は，歴史が古く，心理学の中心的な 領域であり，今後の心理学理解の土台になる。学習面では行動主義，認知主義の心理学を心理学史に沿って理解する。知覚は，精神物理学，ゲ シュタルト心理学を中心に扱う。知能については知能の基礎理論と知能検査の歴史的変遷，測定についてはテスト理論について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	古典的条件づけ（1）（意味と種類）	講義	
2	古典的条件づけ（2）（消去，般化，弁別）	講義	
3	オペラント条件づけ（1）（意味と種類）	講義	
4	オペラント条件づけ（2）（行動主義心理学の理論）	講義	
5	行動療法の考え方と種類	講義	
6	技能学習	講義	
7	社会的学習（模倣，観察学習）	講義	
8	知能（1）（知能の諸理論）	講義	
9	知覚（1）（ゲシュタルト心理学）	講義	
10	知覚（2）（精神物理学） 知覚（3）（錯視，知覚の諸現象）	講義	
11	テスト理論（信頼性，妥当性）	講義	
12	テスト理論（標準化，偏差，Z 得点などの基本用語）	講義	
13	知能（1）（知能の諸理論）	講義	
14	知能（2）（知能検査の発展過程）	講義	
15	知能（3）（知能検査の種類）	講義	

■受講上の注意

■成績評価の方法

定期試験

■テキスト参考書など

森敏昭他:グラフィック認知心理学. サイエンス社 実森正子:学習の心理―行動のメカニズムを探る―. サイエンス社

■備考

障害児心理学

講師:蓑毛 良助

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

各障害児の心理特性と個人差に応じた支援の方法について理解することができる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	視覚障害児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
2	個人差に応じた支援の方法	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
3	聴覚障害児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
4	個人差に応じた支援の方法	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
5	知的障害児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
6	個人差に応じた支援の方法	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
7	肢体不自由児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
8	個人差に応じた支援の方法	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
9	病虚弱児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
10	個人差に応じた支援の方法	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
11	発達障害児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
12	個人差に応じた支援の方法	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
13	言語障害児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
14	情緒障害児の心理特性	講義	意見発表・討論・視聴覚教材
15	評価ペーパー試験	試験	

■受講上の注意

「特別支援教育(クリエイツかもがわ)」のテキストを予習しておくこと

■成績評価の方法

ペーパー試験100%

■テキスト参考書など

特別支援教育(クリエイツかもがわ)

■備考

カウンセリング論

講師：岩元 正知

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

実践的な体験型講義を通して、言語および非言語コミュニケーションや心理カウンセリングにおける言葉の使い方、ねぎらいやユーモラスな分脈の大切さなど、援助を必要とされるクライエントに対するカウンセリング法を学ぶことができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「心身一如」。心の状態が身体の反応と相互に作用していることを理解することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習を予定している。積極的に参加することが望ましい。
2	コミュニケーション体験型講義を通して、信頼の架け橋となる「ラポール」を体感することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習が中心。積極的にすべてのワークを体験することが望ましい。
3	言葉の遅れのある自閉症児に対する療育スキル（ABA）を、映像を通して学ぶことができる。	講義・DVD	課題レポートの提出。
4	NLPカウンセリング体験。実際にカウンセラーおよびクライエントを体験することができる。	講義・GW	二人一組になってのカウンセリング体験。 第二講で学んだ「ラポール・テクニック」を意識しながらカウンセリングすることが望ましい。
5	「コーチング」について理解することができる。同時にNLPコーチングを体験することもできる。	講義・GW	「コーチング」についての学びを通して、STとしてのコーチングの意義を考えてみる。その上で、二人一組になって「NLPコーチング」を体験する。
6	VAKテストを通して、自分の優位な「利き感覚」を理解することができる。	講義	講義中、「VAKテスト」を実施。これはあくまで、自分の「利き感覚」を理解するためのテスト。楽しみながら受験して欲しい。
7	12問の質問を通して、客観的に「本当の自分」について理解を深めることができる。	講義	課題レポートの提出。
8	「アイパターン」と呼ばれる目の動きと内的表象との法則について理解することができる。	講義・GW	二人一組になって、相手に質問し、その時の目の動きを観察しながら、その人の心を読み取る体験をする。
9	「出生順位」によって考え方や行動、人間関係の持ち方に影響が及んでいる可能性について理解することができる。	講義	楽しみながら「出生順位」に関する質問に答えて欲しい。
10	「自閉スペクトラム症」について映像を通して理解することができる。	講義・DVD	課題レポートの提出
11	9問の質問を通して、感情を揺さぶり、または、行動を制限させる自らの「トラウマ」について理解を深めることができる。	講義・GW	二人一組になってのカウンセリング体験。
12	「文章完成療法」を体験し、心（潜在意識）の中にある気付いていない自分を理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「文章完成療法」によるカウンセリング体験。
13	過去に体験したポジティブな想い出と、身体の刺激を一致させる「条件付け（アンカーリング）」を体験することができる。	講義・GW	二人一組になって「アンカーリング・テクニック」を体験。
14	グループの中で、自分の役割が周囲に対し、どのように影響するのか･･･について理解を深めることができる。	講義・GW	五人程度のグループによるコミュニケーショントレーニング体験。積極的に参加することが望ましい。
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（60%）授業中のレポート（20%）授業への参加態度（20%）により相互的に評価する。

■テキスト参考書など

テキストは無し。

■備考

毎回、講義資料を配付する。

心理測定法

講師:岩元 正知

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:3学年
必修選択:必修		

■科目目標

本講義は次の2点についての学びを目的とする。
1. 心はどのように測定することができるか、心理測定法の基礎的知識について理解できる。
2. 言語聴覚士国家試験における心理測定法の過去出題範囲についてマスターできる。
人の心の状態や行動の特性などを解明するために行われる測定を「心理測定」と呼ぶ。「心理測定」は、広い意味では精神測定(一般知能の測定など)とほぼ同じ意味で用いられている。ここには、例えば、感覚・知覚で閾値を測定する「精神物理学的測定法」や、能力・性格などの研究領域での「テスト理論」、好みや社会的態度などの研究における評定法、尺度構成法など、様々な測定法がある。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「統計学」に親しみや興味をもってもらうことができる。	講義	誕生日から性格を割り出す「統計心理学」を実施。
2	「社会調査」や「質問紙法」について理解できる。	講義	
3	統計学の基礎用語について理解できる。	講義	2年次までに学んだ「統計学」の基礎用語(平均値・中央値・最頻値など)を復習しておくことが望ましい。
4	「分散」や「標準偏差」について知識として理解できる。	講義	2年次までに学んだ「統計学」の「分散」や「標準偏差」について復習しておくことが望ましい。
5	「尺度」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	2年次までに学んだ「統計学」の「尺度(名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比率尺度)」について復習しておくことが望ましい
6	「カイ2乗検定」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	第5講の「尺度」に関する小テスト実施。
7	「相関係数」および「クロス分析」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	前講までの「統計学」の用語についての復習が望ましい。
8	「仮説検定」「F検定」「t検定」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	前講までの「統計学」の用語についての復習が望ましい。
9	「精神物理学的測定法」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	「調整法」「恒常法」「極限法」など本講での学びを復習すること。次回、小テスト実施予定。
10	「尺度構成法」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	小テストの実施。
11	「単一事例研究法」についての知識および国試の出題パターンを理解できる。	講義	
12	「信号検出理論」および「多次元尺度構成法」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	記憶の再認課題を実施。
13	「信頼性」「妥当性」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	
14	「多変量解析」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	LETS-2(leeの恋愛色彩理論テスト)実施。
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること(考えてみること)。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験(70%)授業中のレポート(20%)授業への参加態度(10%)により相互的に評価する。

■テキスト参考書など

テキストは無し。

■備考

毎回、講義資料を配付する。

日本語学

講師：奥村 三菜子

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

①様々なポイントから日本語のしくみを理解し、他の人にも簡単に説明できる。
②自分がどんな日本語使用者であるのかを客観的に振り返ることができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	私のことばを知る：自分の母語について客観的に振り返ることができる	GW・講義	4年間学び合うクラスメートのことを知る機会として、積極的にワークに参加してください。
2	日本語のことばと文字①：日本語の語彙の種類の特徴がわかる	GW・講義	
3	日本語のことばと文字②：日本語の文字と表記の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを活用します。
4	日本語のルール：文法から見た日本語の特徴がわかる	GW・講義	
5	日本語の使い分け①：〈やさしい日本語〉を通して、相手や場面による日本語の使い分けができる	GW・講義	
6	日本語の使い分け②：〈要約筆記〉を通して話し言葉と書き言葉の違いがわかる	GW・講義	
7	ことばを使わない日本語表現：日本語のジェスチャーや日本人の会話の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを使用します。
8	私のことばを語る：日本語の特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終レポートの詳しい説明も行います。

■受講上の注意

①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②予習の必要はありませんが、復習・振り返りはぜひ行ってください。

■成績評価の方法

最終レポートで評価を行います。（最終講義終了後、期日内に提出。）
構成（10%）、内容（80%）、表現（10%）。 詳細は最終講義で詳しく説明します。
レポートのタイトル：「私の母語」。パソコンで作成してください（手書き不可）。

■テキスト参考書など

なし。

■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。
各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理してください。
前の授業資料を見る場合もあります。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

言語学

講師：奥村 三菜子

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

①言語のさまざまな見方を理解し、他の人にも簡単に説明できる。
②日本語がどんな言語であるか、例を挙げながら説明することができる。
③国家試験の設問に対応できる言語学の基本知識が身につけられる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語とは何か①： 言語学の歴史や背景がわかる	GW・講義	
2	言語の音のしくみ①： IPA、アクセント、イントネーションについてわかる	GW・講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください。
3	言語の音のしくみ②： 言語によって音の捉え方が異なることがわかる	GW・講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください。
4	言語の音のしくみ③： 日本語における音のバリエーションがわかる	GW・講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください。
5	言語の音と語の関係①： 語のしくみと性質がわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します。
6	言語の音と語の関係②： 語の成り立ちや音の変化についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します。
7	言語の音と語の関係③： 日本語の語の特徴がわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します。
8	言語の文のしくみ①： 文の構造が図式化できる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のルール」で学んだ知識を活用します。
9	言語の文のしくみ②： 人間がどのように文を作っているのかがわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のルール」で学んだ知識を活用します。
10	言語の文のしくみ③： 日本語の文の特徴がわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のルール」で学んだ知識を活用します。
11	言語の意味と運用①： 語や文の意味の捉え方についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します。
12	言語の意味と運用②： 場面や状況によって意味の捉え方が変化することがわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語の使い分け」で学んだ知識を活用します。
13	言語の意味と運用③ 言語と文化の関係についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「ことばを使わない日本語の表現」で学んだ知識を活用します。
14	言語とは何か②： 言語学の用語の意味を、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終試験の詳しい説明も行います。
15	終了試験	筆記試験	

■受講上の注意

①毎回、翌回の授業に向けた「事前タスク」を提示します（初回を除く）。
必ず「事前タスク」に取り組んだ上で、次の授業に臨んでください。
②グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。

■成績評価の方法

終了試験（筆記試験）で評価を行います。（最終講義日に実施。）
試験は、多肢選択問題（60%）、記述問題（40%）で構成されます。
記述問題は事前に提示する複数の設問の中から1～2問出題します。

■テキスト参考書など

『日本語教師のための入門言語学』（スリーエーネットワーク）
＊タイトルに「日本語教師のための」とありますが、内容は普遍的なものです。

■備考

テキストは毎回必ず持ってきてください。
また、授業の際にはプリント等の資料も配布します。各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理し、ファイルは毎回必ず持ってきてください。

日本語音声学

講師：奥村 三菜子

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

①日本語の音のしくみがわかる。
②日本語の話し方の特徴がわかる。
③自分の話し方の特徴に気づける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	日本語のリズム①：日本語のアクセントの基本がわかる	GW・講義	
2	日本語のリズム②：さまざまなアクセントを正確に聞いたり書いたりできる	GW・講義	
3	日本語のリズム③： ・複合語のアクセントのルールが理解できる ・日本語のアクセントの特徴を自分のことばで説明できる	GW・講義	
4	日本語のいろいろな音①：日本語の音のシステムの全体像がつかめる	GW・講義	
5	日本語のいろいろな音②：日本語の調音点と調音法のシステムが理解できる	GW・講義	他科目で学習済みの「音声器官」の図と名称を復習の上、授業に臨んでください。
6	日本語のいろいろな音③：日本語の調音点と調音法の詳細が正確に理解できる	GW・講義	
7	発話の誤り：誤りのある発話を正確に聞き取り、その問題点が説明できる	GW・講義	
8	復習と振り返り：日本語の音声的な特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終試験の詳しい説明も行います。

■受講上の注意

①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②予習の必要はありませんが、復習・振り返りは必ず行ってください。

■成績評価の方法

最終試験（筆記試験）で評価を行います。（最終講義終了後の別日に実施。）
試験は、聴解問題（40%）、多肢選択等の問題（60%）で構成されます。
最終講義で模擬問題に取り組みます。

■テキスト参考書など

なし。

■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。
各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理してください。
前の授業資料を見ることも多いです。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

音声学

講師：瀬戸口 修

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

「音声学」について基礎・基本的な知識を学ぶ。音声器官、音声記号、日本語の標準的な母音・子音について、さらにアクセント、プロミネンス、イントネーションについての理解やその音声記述ができるようにする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	導入「音」に関する知識や感覚のチェック	講義・アンケート	自己紹介（東京式アクセント）、私の言語環境調査（成育歴・アクセントetc）
2	音声学とは	講義	定義（＝概念規定） 小テスト
3	音声「音」と「音声」	講義	定義 宿題「Fdeソシュール」who?
4	音声器官	講義	形づくるしくみ 名称とその働き
5	音声学の3領域	講義	音響音声学、調音音声学、聴覚音声学
6	音声と音素	講義	「音素」の定義 「P音考」
7	日本語の母音・子音について	講義	その種類と音声記述（IPAによる）
8	日本語の音節	講義	音節とは？ 音節の数 音節構造とその連続
9	日本語のアクセント アクセントとは？ 地域差（方言）	講義	No.1～No.8
10	東京語アクセント 性格その1～その4	講義	解説 別プリによるドリル①
11	東京語アクセントの型と補説	講義	→ドリル②
12	日本語の韻律 話しｺﾄﾊﾞの文（単位・話文・語調）	講義	→ドリル③
13	卓立（プロミネンス）	講義	→ドリル④
14	イントネーション 卓立基本型	講義	→ドリル⑤
15	最終試験 まとめ	筆記試験	

■受講上の注意

毎回予習をしておく。日常生活で「音」について興味関心を持ち続ける。

■成績評価の方法

最終試験、課題レポート、授業態度による。

■テキスト参考書など

テキスト：日本語音声学（くろしお出版）、1978年
参考書：日本語音声学入門 改定（三省堂）、1997年

■備考

ﾌﾟﾘﾝﾄは適宜配布する
出席名票には必ず自署すること

音響学

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害を持たれた方へ支援を行う。コミュニケーションには音声も含まれ、そこには「音」が存在する。本科目は「音」について物理学的側面および心理学的側面から講義し、「音」について理解を深めることを目標とする。さらに、音響分析装置を用いて「音声」を観察し、臨床に応用できるようにする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「音」の定義について理解できる	講義・PBL	
2	身近な「音」の違いに気づくことができる	講義・PBL	
3	（音）波の基本的性質について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1章1. 波の基本的性質を予習しておくこと
4	共鳴について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1章2. 定常波と共鳴を予習しておくこと
5	波の現象（うなり・回折等）を理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1章16. 7. を予習しておくこと
6	音の強さと大きさ・音圧について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第2章1. 音圧と音の強さを予習しておくこと
7	デシベル計算に必要な数学的知識（対数log）を確認する	講義・PBL	デシベル計算に必要な数学的知識（対数log）を確認する
8	デシベルの計算ができるようになる	講義・PBL	高校で使用した数学の教科書を持参すること。対数log 計算が苦手な学生は復習しておくこと。
9	音のスペクトルについて理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第3章を予習しておくこと
10	音声とサウンドスペクトログラムについて理解する	講義・TBL	学習のねらいに沿ってテキストの第3章6. を予習しておくこ
11	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる①	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
12	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる②	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
13	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる③	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
14	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる④	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
15	最終試験・解説		

■受講上の注意

音響分析装置を使用するため、ノート型PC を持っていることが望ましい。多少の数学的知識が必要なため、高校数学を復習しておくこと。

■成績評価の方法

講義への参加態度（40%）・最終試験（60%）により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

吉田友敬：言語聴覚士の音響学入門, 海文堂

■備考

PBL: Problem Based Learning
TBL: Team Based Learning

聴覚心理学

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

聴覚心理学とは、音を聴取した時に感じる心理量と音が持つ物理量を定量的に関連づけることを目的とした学問である。本科目では、音の心理的側面と物理的側面の対応関係を理解し、国家試験に対応できることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚心理学の概要を理解する。	講義・TBL	次回からのTBLに向けグループ分けを実施します
2	各グループに与えられた課題（音の心理物理学・聴覚の周波数分析とマスキング・両耳の聞こえ・環境と聴覚）について、グループでディスカッションし、まとめ・プレゼンテーション資料を作成する。	TBL	グループディスカッションに必要な書籍等は事前に準備を行うこと
3	各グループに与えられた課題（音の心理物理学・聴覚の周波数分析とマスキング・両耳の聞こえ・環境と聴覚）について、グループでディスカッションし、まとめ・プレゼンテーション資料を作成する。	TBL	グループディスカッションに必要な書籍等は事前に準備を行うこと
4	音の心理物理学・聴覚の周波数分析とマスキングについて理解する。	TBL	グループディスカッションに必要な書籍等は事前に準備を行うこと
5	両耳の聞こえ・環境と聴覚について理解する。	TBL	グループディスカッションに必要な書籍等は事前に準備を行うこと
6	過去5年間の国家試験において「聴覚心理学」分野の出題問題を把握する。	TBL	グループディスカッションに必要な書籍等は事前に準備を行うこと
7	過去5年間の国家試験において「聴覚心理学」分野の出題問題を把握する。	TBL	グループディスカッションに必要な書籍等は事前に準備を行うこと
8	試験および解説		

■受講上の注意

グループディスカッションに必要な書籍等は事前に準備を行うこと

■成績評価の方法

グループディスカッション40%、試験60%とし、合計60%/100%を合格とする

■テキスト参考書など

資料を配布します。

■備考

言語発達学

講師:提 雄輝

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

子どもがどのような過程でことばを習得していくのか。について学ぶ講義です。
ことばは生涯を通して形作られていきますがその中でも出生から学齢期までのことばの発達は言語コミュニケーションの基盤となります。この講義では、①どのようにことばが育まれていくのか？ ②ことばを育むためにはどうしたらよいか？ ③人はどのように文字を読めるようになっていくのだろう？ ④読みを育むことが出来るのか？ ⑤ことばの発達障害とはどのようなものか？ など言語発達のイメージを膨らませていくことをサポートしていきます。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ことばの基盤について疑問を持てる	ガイダンス・GW	資料の確認
2	始語期のことばについて	講義・GW	小テスト
3	感覚運動発達とことば	講義・GW	小テスト
4	語彙能力の発達について	講義・GW	小テスト
5	統語能力の発達について	講義・GW	小テスト
6	コミュニケーションの発達について	講義・GW	小テスト
7	読み書きの発達について	講義・GW	小テスト
8	試験	講義・GW	小テスト

■受講上の注意

何らかの配慮が必要な場合は申し出てください。ディスカッションの際は肯定的なことばを使用する。資料を揃えて講義に臨む。解らなったこ とは解らないといえる。居眠りについては注意を受けることを理解する。

■成績評価の方法

授業への参加態度(10 %)、授業中のレポート・小テスト(30 %)、試験(60 %)により総合的に評価する

■テキスト参考書など

配布資料で講義を進めていきます

■備考

社会保障制度・関係法規

講師：下村 孝子

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

社会福祉、社会保障制度について体系的に 学習し、その内容を理解することができる。 臨床現場（実習を含め）で、クライエントの11用可能な社会資源について、具体的にイメージできる能力を養い、制度を活かす方法を検討することができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	社会保障制度の概念を理解できる	講義	小テストの実施
2	社会保障の体系・内容を理解できる	講義	小テストの実施
3	少子高齢化の現状を理解し、関連する制度の内容を理解する	講義	小テストの実施
4	社会福祉法の内容を理解する	講義	小テストの実施
5	福祉6法の内容を理解する	講義	小テストの実施
6	障害者福祉に関連する法律の内容を理解する	講義	小テストの実施
7	社会福祉援助技術、ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ概論を理解する	講義	小テストの実施
8	まとめ・試験		前回までの内容を復習する

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

筆記試験（100%）

■テキスト参考書など

資料を配布

■備考

リハビリテーション概論

講師：戌亥 啓一、酒匂 久光

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

目指す職種がどのような位置にあるのか、その視点、役割を理解する。
関わる職種はどのような職種なのか、その役割、目的の違いを理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーションの構成メンバー・目指すものへの理解を深める。	講義・GW	事前配付資料を確認しておく。
2	ICFに基づく考え方に触れる。	講義・GW	専門用語や考え方の概要を確認しておく。
3	疾患・病期等からみたリハビリテーションへの理解を深める。	講義・GW	事前配付資料の要点・専門用語を確認しておく。
4	障害に対するリハビリテーションへの理解を深める①	講義・演習	配付資料の要点を確認する。演習を行います。運動ができる服装で望んで下さい。
5	障害に対するリハビリテーションへの理解を深める②	講義・演習	配付資料の要点を確認する。演習を行います。運動ができる服装で望んで下さい。
6	障害者スポーツの意義と理念を理解し、様々な障害者スポーツの種目を知る。	講義	配付資料の要点を確認する。
7	障害者スポーツ（ボッチャ・車椅子バスケットボール）のルールを理解し、体験することで障害者スポーツの楽しみを知る。	講義	配付資料の要点を確認する。演習を行います。運動ができる服装で臨んで下さい。
8	試験・解説	試験	基礎的な内容を問う試験を実施します。特に専門用語や概念の確認をして臨んで下さい。

■受講上の注意

ディスカッション場面では受身にならないよう参加して下さい。
理解度への影響を考慮し、特定の講義にてレポート作成を指示する場合があります。
授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

最終講義にて試験を実施します。

■テキスト参考書など

事前に配付します。

■備考

障害児教育学

講師:提 雄輝

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:1学年

必修選択:必修

■科目目標

言語聴覚士として障害のある児童・生徒と接する上で必要となる教育の視点を養う。また、特別支援教育制度を概括的に捉えることを目標とする。具体的には以下の 2 点を授業目的とする。①今日求められている障害のある子どもへの教育の意義と目的を明らかにする。②特別支援教育の制度や法律を概括的に捉え、連携や教育的支援の内容を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ガイダンス	講義・GW	教科書・配布資料を読んでくる
2	共生社会	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
3	ノーマライゼーション	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
4	インクルーシブ教育	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
5	合理的配慮	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
6	特別支援教育史	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
7	特別支援学校について	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
8	特別支援学級と通常学級	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
9	通級指導教室	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
10	ユニバーサルデザイン教育	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
11	就学指導	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
12	特別支援学校の教育課程	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
13	乳幼児・児童期の健康診査	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
14	ふりかえり	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成
15	学習の確認	講義・GW	プレゼンテーション資料の効果的な作成

■受講上の注意

何らかの配慮が必要な場合は申し出ること。ディスカッションの際は肯定的なことばを使用する。資料を揃えて講義に臨むこと。居眠りについては注意を受けることを理解すること。レポート提出期限を守ること。

■成績評価の方法

授業への参加態度(10 %)、レポート・プレゼン資料(30 %)、試験(60 %)により総合的に評価する

■テキスト参考書など

キーワードブック特別支援教育　出版社: クリエイツかもがわ

■備考

言語聴覚障害学総論

講師：松尾 康弘、冨山 翔太、川元 真由美、高吉 進、福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

【一般目標】
・言語聴覚士と言語聴覚療法について理解し、自己の職業観を究めることができる
【到達目標】
・言語聴覚士の歴史的な流れとその意味を概説できる
・言語聴覚療法の対象者について具体的に説明できる
・言語聴覚療法の一般的な流れを説明できる
・言語聴覚士に関連する法律を概説できる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士の仕事や定義について説明できる	講義・TBL	講義を聞き、他者と自分自身の意見を相互交換することを体験してもらいます
2	言語聴覚士の歴史を理解し、未来について熟考することができる	講義	テキストの該当するページを読んでおいてください
3	言語聴覚療法の対象者を理解する	講義・TBL	テキストの該当するページを読んでおいてください
4	ヒトのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝについて説明できる	講義・TBL	テキストの該当するページを読んでおいてください
5	言語聴覚士になるための道のりについて理解する	TBL	テキストの該当するページを読んでおいてください
6	聴覚障害とそのアプローチを説明できる	講 義	テキストの該当するページを読んでおいてください レポートが課されます
7	子どもの言語聴覚障害を理解する	講 義	テキストの該当するページを読んでおいてください
8	子どもの言語聴覚障害を理解する	講 義	テキストの該当するページを読んでおいてください レポートが課されます
9	構音障害（機能性・器質性・運動障害性）について説明できる	講 義	テキストの該当するページを読んでおいてください レポートが課されます
10	摂食嚥下障害とそのアプローチについて理解する	講 義	テキストの該当するページを読んでおいてください レポートが課されます
11	地域社会における医療・福祉・教育の状況、言語聴覚士の偏在の状況を説明できる	講 義	テキストの該当するページを読んでおいてください
12	言語聴覚療法の一般的な流れを説明できる	講義・TBL	テキストの該当するページを読んでおいてください
13	チームアプローチについて説明できる	講義・TBL	テキストの該当するページを読んでおいてください
14	リハビリテーションについて説明できる	TBL	フィールドワークを実施します。動きやすい服装
15	講義を踏まえ自分の考えを整理して述べることができる	試験・講義	自分でタイトルを考え、総括のレポートを作成してもらいます

■受講上の注意

講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行ってください。各講義の後にリフレクションカードの作成と提出をしていただきます。

■成績評価の方法

リフレクションカードの内容評価（40点）、レポート（40点）、総括レポート（20点）で総合的に評価します。

■テキスト参考書など

小嶋知幸：図解やさしくわかる言語聴覚障害、ナツメ社
倉内紀子：言語聴覚障害総論Ⅰ、建帛社

■備考

言語聴覚障害診断学

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士は、専門的な相談治療を求めてきた人との最初の面接を通し、主訴や言語障害の種類や程度、関連する諸問題を素早く把握しなければならない。
本科目は、評価・診断に関わる知識を得て、実際の評価診断の流れを理解することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	評価の流れ、スクリーニングの役割が理解できる	講義	1年次に学んだ言語聴覚障害総論を復習しておくこと
2	初回面接の目的・留意点の把握、導入について理解できる	講義	1年次に学んだ言語聴覚障害総論を復習しておくこと
3	成人領域の言語聴覚障害の鑑別点について理解できる	TBL	
4	小児領域の言語聴覚障害の鑑別点について理解できる	TBL	
5	スクリーニング検査を作成できる	TBL	
6	スクリーニング検査を作成できる	TBL	
7	スクリーニング検査を作成できる	TBL	
8	最終試験・解説		

■受講上の注意

ディスカッションを主体とした講義となるため、積極的な参加を期待する。

■成績評価の方法

最終試験において60点/100点以上を合格とする。再試験も同様に60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

資料配付
言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
言語聴覚士テキスト第2版，医歯薬出版

■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)
TBL: Team Based Learning(チーム基盤型学習)

言語聴覚障害診断学演習

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士は、専門的な相談治療を求めてきた人との最初の面接を通し、主訴や言語障害の種類や程度、関連する諸問題を素早く把握しなければならない。
本科目は診断学で得た知識と実際の演習をとおし、実際の評価および診断ができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	本演習の流れを理解できる	講義・TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
2	模擬症例①スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
3	模擬症例①スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
4	模擬症例①スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
5	模擬症例②スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
6	模擬症例②スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
7	模擬症例②スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
8	模擬症例③スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
9	模擬症例③スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
10	模擬症例③スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
11	模擬症例④スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
12	模擬症例④スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
13	模擬症例④スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
14	模擬症例④スクリーニング検査が実施できる	TBL	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
15	実技試験・OSCE		

■受講上の注意

白衣にて受講すること。身だしなみに注意すること。実技試験においては、学園外の方々が来校される。個人情報保護の遵守および失礼の無いようにすること。

■成績評価の方法

講義・演習態度(30%)・ワークシートおよびレポート提出・内容(30%)
実技試験(40%)により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

資料配付
言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
言語聴覚士テキスト第2版，医歯薬出版

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

言語聴覚障害学特論Ⅰ

講師:専任教員

単位数:3単位　時間数:90時間　授業学年:4学年

必修選択:必修

■科目目標

言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる。本科目は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた基礎知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各科目の資料・ノート、また言語聴覚士学生を対象とした総合的な教科書が重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。なお、本科目の単位認定試験は卒業試験として位置付ける。単位未修得者は卒業資格が与えられない事もある。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	基礎医学分野の知識を再確認する(医学総論・解剖学・生理学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	基礎医学分野の知識を再確認する(医学総論・解剖学・生理学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	基礎医学分野の知識を再確認する(医学総論・解剖学・生理学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	基礎医学分野の知識を再確認する(病理学・内科学・小児科学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	基礎医学分野の知識を再確認する(病理学・内科学・小児科学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	基礎医学分野の知識を再確認する(病理学・内科学・小児科学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	基礎医学分野の知識を再確認する(精神医学・リハビリテーション医学・耳鼻科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	基礎医学分野の知識を再確認する(精神医学・リハビリテーション医学・耳鼻科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	基礎医学分野の知識を再確認する(精神医学・リハビリテーション医学・耳鼻科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	基礎医学分野の知識を再確認する(臨床神経・形成外科・歯科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	基礎医学分野の知識を再確認する(臨床神経・形成外科・歯科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	基礎医学分野の知識を再確認する(臨床神経・形成外科・歯科)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	基礎医学分野の知識を再確認する(口腔外科・呼吸発声発語系)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	基礎医学分野の知識を再確認する(口腔外科・呼吸発声発語系)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	基礎医学分野の知識を再確認する(口腔外科・呼吸発声発語系)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
16	基礎医学分野の知識を再確認する (聴覚系の構造・機能・病態・神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
17	基礎医学分野の知識を再確認する (聴覚系の構造・機能・病態・神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
18	基礎医学分野の知識を再確認する (聴覚系の構造・機能・病態・神経系の構造・機能・病態)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
19	心理学分野の知識を再確認する(認知・学習心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
20	心理学分野の知識を再確認する(認知・学習心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
21	心理学分野の知識を再確認する(認知・学習心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う

22	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
23	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
24	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
25	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
26	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
27	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
28	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
29	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
30	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
31	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
32	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
33	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
34	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
35	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
36	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
37	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
38	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
39	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
40	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
41	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
42	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
43	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
44	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
45	単位認定試験　解説	講義

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本科目の単位認定試験は卒業試験とする。試験において正答率60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

独自の資料
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂
言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

言語聴覚障害学特論Ⅱ

講師：専任教員

単位数：3単位　時間数：90時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる。本科目は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた基礎知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各科目の資料・ノート、また言語聴覚士学生を対象とした総合的な教科書が重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。なお、本科目の単位認定試験は卒業試験として位置付ける。単位未修得者は卒業資格が与えられない事もある。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	社会福祉・教育分野の再確認をする（社会保障制度）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	社会福祉・教育分野の再確認をする（社会保障制度）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	社会福祉・教育分野の再確認をする（社会保障制度）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	社会福祉・教育分野の再確認をする（リハビリテーション概論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	社会福祉・教育分野の再確認をする（リハビリテーション概論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	社会福祉・教育分野の再確認をする（リハビリテーション概論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	社会福祉・教育分野の再確認をする（医療福祉教育・関係法規）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	社会福祉・教育分野の再確認をする（医療福祉教育・関係法規）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	社会福祉・教育分野の再確認をする（医療福祉教育・関係法規）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害学総論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害学総論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害学総論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害診断学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害診断学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害診断学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
16	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
17	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
18	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
19	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
20	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
21	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う

22	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
23	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
24	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
25	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
26	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
27	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
28	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症⑤）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
29	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症⑤）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
30	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症⑤）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
31	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害①）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
32	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害①）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
33	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害①）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
34	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害②）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
35	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害②）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
36	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害②）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
37	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
38	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
39	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
40	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
41	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
42	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
43	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
44	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
45	単位認定試験　解説	講義

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本科目の単位認定試験は卒業試験とする。試験において正答率60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

独自の資料
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂
言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

言語聴覚障害学特論Ⅲ

講師：専任教員

単位数：3単位　時間数：90時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる。本科目は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた基礎知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各科目の資料・ノート、また言語聴覚士学生を対象とした総合的な教科書が重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。なお、本科目の単位認定試験は卒業試験として位置付ける。単位未修得者は卒業資格が与えられない事もある。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学③）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学③）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学③）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学④）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学④）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学④）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（音声障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（音声障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（音声障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
16	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（構音障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
17	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（構音障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
18	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（構音障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
19	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（嚥下障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
20	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（嚥下障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
21	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（嚥下障害）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う

22	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（吃音）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
23	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（吃音）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
24	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（吃音）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
25	聴覚障害学分野の再確認をする（小児聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
26	聴覚障害学分野の再確認をする（小児聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
27	聴覚障害学分野の再確認をする（小児聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
28	聴覚障害学分野の再確認をする（成人聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
29	聴覚障害学分野の再確認をする（成人聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
30	聴覚障害学分野の再確認をする（成人聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
31	聴覚障害学分野の再確認をする（補聴器・人工内耳）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
32	聴覚障害学分野の再確認をする（補聴器・人工内耳）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
33	聴覚障害学分野の再確認をする（補聴器・人工内耳）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
34	聴覚障害学分野の再確認をする（視覚聴覚二重障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
35	聴覚障害学分野の再確認をする（視覚聴覚二重障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
36	聴覚障害学分野の再確認をする（視覚聴覚二重障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
37	総まとめ①	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
38	総まとめ①	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
39	総まとめ①	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
40	総まとめ②	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
41	総まとめ②	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
42	総まとめ②	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
43	総まとめ②	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
44	総まとめ②	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
45	単位認定試験　解説	講義

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本科目の単位認定試験は卒業試験とする。試験において正答率60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

独自の資料
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂
言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

言語聴覚総合演習

講師：専任教員

単位数：3単位　時間数：90時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義は、総合演習として1年次より学んだ基礎科目および専門科目を基礎として、様々な言語聴覚障害に関わる演習をおこない、言語聴覚療法の総合的な理解を得ることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害・補聴器ディスカッション	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
2	聴覚障害・補聴器ディスカッション	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
3	聴覚障害・補聴器ディスカッション	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
4	聴覚障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
5	聴覚障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
6	聴覚障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
7	失語症まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
8	失語症まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
9	失語症まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
10	高次脳機能障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
11	高次脳機能障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
12	高次脳機能障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
13	グループディスカッション1（聴覚障害分野）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
14	グループディスカッション1（聴覚障害分野）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
15	グループディスカッション1（聴覚障害分野）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
16	グループディスカッション2（失語症・高次脳機能障害）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
17	グループディスカッション2（失語症・高次脳機能障害）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
18	グループディスカッション2（失語症・高次脳機能障害）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
19	小児疾患と障害のまとめ1	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
20	小児疾患と障害のまとめ1	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
21	小児疾患と障害のまとめ1	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う

22	小児疾患と障害のまとめ２	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
23	小児疾患と障害のまとめ２	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
24	小児疾患と障害のまとめ２	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
25	グループディスカッション３（小児疾患）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
26	グループディスカッション３（小児疾患）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
27	グループディスカッション３（小児疾患）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
28	グループディスカッション４（小児リハビリテーション）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
29	グループディスカッション４（小児リハビリテーション）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
30	グループディスカッション４（小児リハビリテーション）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

総合試験を行い、60％以上の正答率を合格とする。

■テキスト参考書など

資料配布
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂
言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

失語症学Ⅰ

講師：高吉 進

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

【一般目標】
・失語症の臨床に関する体系的な知識を得る。
・失語症を理解するために必要な神経学的知識、言語症状について詳細に把握する。
【到達目標】
・失語症について自ら調べ、正確な知識としてアウトプットすることができる
・仲間と協働して課題の解決に取り組み、正確な知識を共有できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	講義の進め方と聴講者の取り組みについて把握する。失語症の全体像を知る。	講 義	講義の中で失語症者の動画を視聴し、感想を述べていただきます。感想文は次講義で学習を深める際に活用します。
2	失語症者の社会復帰の現状と課題を把握する。前回の講義等を踏まえ皆で考える。	講義・TBL	前回視聴した動画に対する感想を書きとめたものを持参する。テキストのp62～67, p190～209を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
3	失語症研究の歴史年表を作成する。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキストp2～9を読んでおくこと。グループ年表を作成します。
4	失語症の定義を理解し、説明できる。大脳の機能局在を理解する事ができる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp12～17を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
5	言語処理モデルについて理解することができる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp18～19を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
6	言語処理モデルについて理解することができる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp134～139,l3を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
7	失語症の言語症状を理解すする	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp19～39を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
8	失語症の言語症状を理解する	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp39～45を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
9	ブローカ失語とウェルニッケ失語を詳細に説明できる	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp46～61を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
10	失名詞失語と伝導失語を説明できる。超皮質性タイプ群を説明できる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp46～61を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
11	全失語、その他の失語症について説明できる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp46～61を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
12	失語症者支援のために必要な臨床活動について理解することができる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp74～80を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
13	失語症に合併する関連障害とそれらの鑑別方法を理解することができる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp80～106を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
14	失語症に合併する関連障害を知り、鑑別の方法が何か理解することができる。	講義・TBL	前回の講義のまとめを代表者にしていただきます。テキストp80～106を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
15	学習内容の振り返り、専門知識の深化を図ることができる。	講義・TBL	グループ対抗で講義内容を振り返る。これまでの講義資料などを持参してください。まとめクイズを実施します。

■受講上の注意

講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行ってください。各講義の後にリフレクションシートの作成と提出をしていただきます。

■成績評価の方法

学期末に実施する筆記試験（60点分：症例報告書作成）および、毎回のリフレクションカードの内容評価（30点）、発表（10点）で総合的に評価します。リフレクションカードと発表の評価基準については事前に評定シートを配布します。

■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト）①石川裕治 編著『改訂 失語症』（建帛社）②小嶋知幸編著『なるほど 失語症の評価と治療』（金原出版）③藤田郁代，立石雅子編集『失語症学』（医学書院）

■備考

TBLとは，能動的学習を育成することを重視し，グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

失語症学Ⅱ

講師:高吉 進

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

【一般目標】
・失語症を理解するために必要な神経学的知識、言語症状の詳細な把握、リハビリテーションの基本的観点と手技を理解する事ができる。
【到達目標】
・失語症について自ら調べ、正確な知識としてアウトプットすることができる
・仲間と協働して課題の解決に取り組み、正確な知識を共有できる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語モダリティ別にどのような評価を行ったら良いか習得する。	講 義	講義までに失語症Ⅰの内容について振り返りを行っておいてください。テキスト①p106～115を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
2	言語評価をまとめる際の必要な情報は何か把握する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト①p116～129を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
3	失語症者の全体評価のために、どのような検査を行うか説明する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト①p129～132を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
4	検査データから失語症者の障害メカニズムを推定する方法を習得する。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト①p142～150を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
5	認知神経心理学をもとに失語症検査の情報処理モデルを解説する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト②p9～51を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
6	認知神経心理学をもとに失語症検査の情報処理モデルを解説する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト②p9～51を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
7	認知神経心理学をもとに失語症検査の情報処理モデルを解説する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト②p9～51を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
8	失語症検査プロフィールを読み解く力を身に付ける。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト②p53～559を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
9	掘り下げ検査についてその目的と方法を説明する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト②p61～70を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
10	失語症治療の原則と病期別治療目標について把握する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト③p182～194を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
11	言語治療の理論と技法について説明する事ができる。	講義・TBL	前回の講義について5分間で代表者が発表。テキスト③p194～209を読んでおくこと。グループで課題を検討します。
12	失語症者をとりまく人々へどのようなアプローチがあるか理解する。	講義・TBL	テキスト①p173～177を読み、関連情報などを必ず準備しておくこと。グループで課題を検討します。
13	リハビリテーションにおける職種間連携の必要性を説明する事ができる。	講義・TBL	テキストp115～129を読み、関連情報などを必ず準備しておくこと。グループで課題を検討します。
14	症例報告書を読み解き、他者に分かりやすく説明する事ができる。	講義・TBL	講義までに、各グループで文献や症例報告集にあたり、どのような内容であったかを講義中に5分程度で発表してもらいます。
15	学習内容の振り返り、専門知識の深化を図ることができる。	講義・TBL	グループ対抗でまとめクイズを実施。学んだ知識を振り返ります。これまでの講義資料などを持参してください。

■受講上の注意

講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行ってください。各講義の後にリフレクションシートの作成と提出をしていただきます。

■成績評価の方法

学期末に実施する筆記試験(60点分:症例報告書作成)および、毎回のリフレクションカードの内容評価(30点)、発表(10点)で総合的に評価します。リフレクションカードと発表の評価基準については事前に評定シートを配布します。

■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト)①石川裕治 編著『改訂 失語症』(建帛社)②小嶋知幸編著『なるほど 失語症の評価と治療』(金原出版)③藤田郁代, 立石雅子編集『失語症学』(医学書院)

■備考

TBLとは, 能動的学習を育成することを重視し, グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

失語症学演習Ⅰ

講師：高吉 進

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

【一般目標】
・失語症検査の概要・実施手順・結果のまとめ・解析を行うことができる
【到達目標】
・失語症検査を自ら調べ、正確な知識としてアウトプットできる
・仲間と共同して、検査結果の解析を行い、情報共有できる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	SLTAの概要を理解する	講義	SLTAのマニュアルを読んでおくこと
2	SLTAの聴く項目の実施手順を把握する	講義・TBL	SLTAのマニュアルを読んでおくこと
3	SLTAの話す項目の実施手順を把握する	講義・TBL	SLTAのマニュアルを読んでおくこと
4	SLTAの読む項目の実施手順を把握する	講義・TBL	SLTAのマニュアルを読んでおくこと
5	SLTAの書く・計算項目の実施手順を把握する	講義・TBL	SLTAのマニュアルを読んでおくこと
6	SLTAの結果のまとめを理解する	講義・TBL	SLTAのマニュアルを読んでおくこと
7	SLTAの結果の解釈を行う	講義・TBL	SLTAのマニュアルを読んでおくこと
8	重度失語症検査の概要を理解する	講義・TBL	重度失語症検査のマニュアルを読んでおくこと
9	重度失語症検査の実施手順を把握する	講義・TBL	重度失語症検査のマニュアルを読んでおくこと
10	失語症構文検査の概要を理解する	講義・TBL	失語症構文検査のマニュアルを読んでおくこと
11	失語症構文検査の実施手順を把握する	講義・TBL	失語症構文検査のマニュアルを読んでおくこと
12	実用コミュニケーション能力検査の概要を理解する	講義・TBL	実用コミュニケーション能力検査のマニュアルを読んでおくこと
13	実用コミュニケーション能力検査の実施手順を把握する	講義・TBL	実用コミュニケーション能力検査のマニュアルを読んでおくこと
14	SALA失語症検査の概要・実施手順を把握する	講義・TBL	SALA失語症検査のマニュアルを読んでおくこと
15	単位認定試験	筆記試験	失語症検査の概要・結果のまとめ・解析を理解する

■受講上の注意

各検査のマニュアルを理解すること

■成績評価の方法

演習を含むため出席を重視する（40点）、学期末に実施する筆記試験（40点：5択問題）および、小テスト（20点：5択問題）で総合的に評価

■テキスト参考書など

SLTA、重度失語症検査、失語症構文検査、実用コミュニケーション能力検査、SALA失語症検査の各マニュアル

■備考

失語症学演習Ⅱ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

【一般目標】
・失語症の評価・診断をもとに適切なプログラム立案ならびに訓練実施ができる。
【到達目標】
・失語症訓練のための必要な基本的臨床技能を身に付ける。
・言語モダリティ別情報処理モデルをもとに分析ができる。
・病期に応じた訓練の計画・実施ができる。
・的確な報告書の作成ができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語評価の目的を理解する	講義・TBL	講義を聞き、他者と自分自身の意見を相互交換することを体験してもらいます
2	言語聴覚療法の流れを理解する	講義・TBL	講義のねらいに従って、テキスト等を読んでおくこと
3	急性期の言語訓練を理解する	講義・TBL	講義のねらいに従って、テキスト等を読んでおくこと
4	集中的訓練期の言語訓練を理解する	講義・TBL	講義のねらいに従って、テキスト等を読んでおくこと
5	維持期の言語訓練を理解する	講義・TBL	講義のねらいに従って、テキスト等を読んでおくこと
6	言語治療の理論と技法を理解する	講義・TBL	講義のねらいに従って、テキスト等を読んでおくこと
7	構文処理障害への支援を理解する	講義・TBL	講義のねらいに従って、テキスト等を読んでおくこと
8	語彙障害の訓練（意味セラピーと音韻セラピー）を理解する	講義・TBL	講義のねらいに従って、テキスト等を読んでおくこと
9	paper patientに基づいてどのような問題点があるか考察することができる	PBL	チームで積極的に議論し、症例の問題点を列挙してもらいます
10	paper patientに基づいてどのような問題点があるか説明できる	PBL	チームで積極的に議論し、症例の問題点を列挙してもらいます
11	paper patientに基づいてどのような訓練法が良いか考察する事ができる	PBL	チームで積極的に議論し、症例に対する訓練プログラムを検討してもらいます
12	計画した訓練プログラムの実施ができる	PBL	各グループにて訓練の実演を行ってもらいます
13	計画した訓練プログラムの実施ができる	PBL	各グループにて訓練の実演を行ってもらいます
14	計画した訓練プログラムの実施ができる	PBL	各グループにて訓練の実演を行ってもらいます
15	単位認定試験・解説	筆記試験	代表的な言語訓練について筆記試験（語句説明）を行います。

■受講上の注意
講義の大半をTBLで実施します。各講義のねらいに従って検査手引書等で必ず予習を行ってください。各講義の後に小テスト問題の作成と提出をしていただきます。
＊レポート課題「認知神経心理学立場からみたSLTA各検査項目の分析」提出期限は9回目の講義終了後に予定しています。

■成績評価の方法
演習を含むため出席を重視する（40点）、学期末に実施する筆記試験（40点：5択問題）および、小テスト（20点：5択問題）で総合的に評価します。

■テキスト参考書など
本講義で使用するテキスト）①竹内愛子編集『失語症臨床ガイド』（協同医書）
参考図書）①石川裕治 編著『改訂 失語症』（建帛社）②小嶋知幸編著『なるほど 失語症の評価と治療』（金原出版）③藤田郁代，立石雅子 編集『失語症学』（医学書院）

■備考

高次脳機能障害学Ⅰ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

脳血管障害等で生じる後遺症は、運動・感覚障害だけでなく高次脳機能障害も多く認められる。本科目では、脳機能を踏まえ、認知・行為のメカニズム、神経心理学の概要を理解することを目標とする。
・神経心理学の基本概念が理解できる。
・背景症状および各種失認症・失行症の定義および病態が説明できる。
・背景症状および各種失認症・失行症の評価および訓練法について説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学および高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第1章を予習しておくこと
2	神経心理学および高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第1章を復習しておくこと
3	視覚認知およびその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第2章を予習しておくこと
4	視覚認知およびその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第2章を復習しておくこと
5	視空間認知とその障害（半側空間無視・地誌的見当識障害）について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第3章（半側空間無視・地誌的見当識障害）を予習しておくこと
6	視空間認知とその障害（バリント症候群・視覚性運動失調・構成障害）について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第3章（バリント症候群・視覚性運動失調・構成障害）を予習しておくこと
7	視空間認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第3章を復習しておくこと
8	聴覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第4章を予習しておくこと
9	聴覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第4章を復習しておくこと
10	触覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第5章を予習しておくこと
11	触覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第5章を復習しておくこと
12	身体意識・病態認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第6章を予習しておくこと
13	身体意識・病態認知の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第6章を復習しておくこと
14	行為・動作のメカニズムとその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第7章を予習しておくこと
15	行為・動作のメカニズムとその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第7章を復習しておくこと

■受講上の注意

本講義はPBL を中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的

■成績評価の方法

講義への参加態度（20%）・ワークシート提出（40%）・試験（40%）により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学高次脳機能障害第2 版，医学書院

■備考

PBL: Problem Based Learning（問題発見解決型学習）

高次脳機能障害学Ⅱ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

近年、脳機能研究が進み、古典的な高次脳機能障害（失行・失認）だけでなく、意識障害、注意障害、記憶障害、認知症といった全体的症状に対する支援において、言語聴覚士の期待が高まっている。本科目ではコミュニケーションに係る高次脳機能障害の理解ができることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	記憶とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第8章を予習しておくこと
2	記憶とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第8章を予習しておくこと
3	記憶とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第8章を復習しておくこと
4	前頭葉と高次脳機能障害の関係について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第9章を予習しておくこと
5	前頭葉と高次脳機能障害の関係についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第9章を復習しておくこと
6	数処理・計算とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第10章を予習しておくこと
7	数処理・計算の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第10章を復習しておくこと
8	脳梁離断症状について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第11章を予習しておくこと
9	脳梁離断症状についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第11章を復習しておくこと
10	認知症について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第12章を予習しておくこと
11	認知症についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第12章を復習しておくこと
12	脳外傷に伴う高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第13章を予習しておくこと
13	脳外傷に伴う高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第13章を復習しておくこと
14	運動ニューロン疾患の高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第14章を予習しておくこと
15	運動ニューロン疾患の高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第14章を復習しておくこと

■受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

■成績評価の方法

講義への参加態度(20%)・ワークシート提出（40%）・試験（40%）により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害第2版，医学書院

■備考

16コマ目に試験を実施する。
PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)

高次脳機能障害学演習 Ⅰ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

近年、脳機能研究が進み、高次脳機能へ対する関心が高まっている。また、近年の高次脳機能障害に関する論文では、失語・失行・失認だけでなく、注意障害・記憶障害・遂行機能障害・社会的行動障害に関するものも多く、認知リハビリテーションの対象も拡大している。
本科目では、高次脳機能障害学分野における最新の研究（文献）を紹介し、臨床現場に結びつけることができる知識・応用力の習得を目指す。また自身で論文を詳読できるようになること、高次脳機能における研究法およびその進め方について理解することを目標とする。さらに、学会形式でポスター発表ができるようになることを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	高次脳機能およびその障害に関する研究論文の概要を知る	演習	高次脳機能研究（日本高次脳機能障害雑誌）を事前に目を通しておくこと
2	認知リハビリテーション（MAPT）を研究論文を通して理解する	演習	高次脳機能障害学Ⅱで学んだMAPTを復習しておくこと
3	認知リハビリテーション（MAPT）を研究論文を通して理解する	演習	高次脳機能障害学Ⅱで学んだMAPTを復習しておくこと
4	認知リハビリテーション（記憶障害に対する）を研究論文を通して理解する	演習	高次脳機能障害学Ⅱで学んだ記憶障害を復習しておくこと
5	認知リハビリテーション（認知症に対する）を研究論文を通して理解する	演習	高次脳機能障害学Ⅱで学んだ認知症を復習しておくこと
6	高次脳機能とその障害に関する発表用ポスター作製の概要を知る	演習	サインペンを準備しておくこと
7	発表テーマを決定する	TBL	
8	発表用ポスターを作成できる	TBL	ポスター作製に必要な資料（論文・教科書）を持参すること
9	発表用ポスターを作成できる	TBL	ポスター作製に必要な資料（論文・教科書）を持参すること
10	発表用ポスターを作成できる	TBL	ポスター作製に必要な資料（論文・教科書）を持参すること
11	発表用ポスターを作成できる	TBL	ポスター作製に必要な資料（論文・教科書）を持参すること
12	発表用ポスターを作成できる	TBL	ポスター作製に必要な資料（論文・教科書）を持参すること
13	発表用ポスターを作成できる	TBL	事前に予行会を実施しておくこと
14	発表用ポスターを作成できる	TBL	事前に予行会を実施しておくこと
15	最終試験・解説		

■受講上の注意

本講義は論文詳読およびTBLで講義を進めるため、予習は必須となる。また、チームでの活動となるため、チーム内での活発なディスカッションを期待する。

■成績評価の方法

講義への参加態度(30%)・ポスター発表(30%)・最終試験(40%)により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害第2版，医学書院
高次脳機能研究、その他各種資料

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

高次脳機能障害学演習Ⅱ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士が係る高次脳機能障害は、失語症のみならず失行・失認症・注意障害・遂行機能障害および認知症など非常に多岐にわたる。本科目では代表的な神経心理学検査を通して理論や手続きを習得し、実施（考察を含む）が可能になること目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	知能に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	日本版レーヴン色彩マトリックス検査マニュアルを準備しておくこと
2	知能に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	コース立方体組み合わせ検査マニュアルを準備しておくこと
3	知能に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	WAIS-Ⅲマニュアルを準備しておくこと
4	知能に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	WAIS-Ⅲマニュアルを準備しておくこと
5	知能に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	WAIS-Ⅲマニュアルを準備しておくこと
6	知能に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	WAIS-Ⅲマニュアルを準備しておくこと
7	記憶に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	WMSマニュアルを準備しておくこと
8	記憶に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	WMSマニュアルを準備しておくこと
9	記憶に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	WMSマニュアルを準備しておくこと
10	記憶に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	三宅式記銘力検査マニュアルを準備しておくこと
11	注意に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	CATマニュアルを準備しておくこと
12	注意に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	CATマニュアルを準備しておくこと
13	注意に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	CATマニュアルを準備しておくこと
14	注意に係る神経心理学検査が実施できるようになる	TBL	CATマニュアルを準備しておくこと
15	最終試験・解説		

■受講上の注意

講義には各種検査マニュアルおよび記録用紙を持参すること。

■成績評価の方法

講義への参加態度(40%)・最終試験(60%)により総合的に評価し、60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

言語発達障害学Ⅰ

講師：福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

概要：ことばの面白さ、不思議さを考えながら、言語を獲得することによって子どもが自らの世界をどのように切り開いていくのかを考える。言語発達に関連する心理学的な知識を紹介する。
到達目標1：言語発達を促すために必要な認知・社会的な発達を理解する
到達目標2：言語発達段階を知る
到達目標3：言語発達障害を知る

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「ことば」とは何か学ぶ	講義	言語発達学の復習
2	前言語期の発達を学ぶ	講義	言語発達学の復習
3	語彙獲得期の発達を学ぶ	講義	言語発達学の復習
4	幼児期の発達を学ぶ	講義	言語発達学の復習
5	学童期の発達を学ぶ	講義	言語発達学の復習
6	読み書きの発達を学ぶ	講義	予習
7	発達年齢に即した遊びを学ぶ	GW	予習・復習
8	発達障害の概要について学ぶ	講義	予習
9	知的障害の概要について学ぶ	講義	予習
10	自閉症スペクトラムの概要について学ぶ	講義	予習
11	ADHDの概要について学ぶ	講義	予習
12	特異的言語発達遅滞について学ぶ	講義	予習
13	脳性まひについて学ぶ	講義	予習
14	学習障害について学ぶ	講義	予習・復習
15	単位認定試験・解説	試験	

■受講上の注意

予習として指定された項目を読んでおくこと。

■成績評価の方法

評価対象：定期試験
評価基準：定期テスト100%

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
言語聴覚士テキスト第2版，医歯薬出版

その他の参考資料は随時配付する。

■備考

言語発達障害学Ⅱ

講師：福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

定型の言語獲得過程を指標として、発達障害に伴う言語発達障害の特徴と評価・支援について理解することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達障害の概要・復習	講義	言語発達障害学Ⅰの復習
2	言語発達段階について理解する、言語発達障害の病態について学ぶ 言語発達障害の評価・支援について学ぶ	講義	言語発達障害学Ⅰの復習
3	語彙獲得期の評価・支援、インリアル・アプローチについて理解する 幼児期の評価・支援について理解する	講義	言語発達障害学Ⅰの復習
4	学童期の評価・支援について理解する	講義	言語発達障害学Ⅰの復習
5	自閉症スペクトラム障害の評価・支援について理解する	講義	ASDの予習・復習
6	知的障害の評価・支援について理解する	講義	知的障害について予習・復習
7	注意欠如/多動性障害の概要、支援について理解する	講義、GW	ADHDについて予習・復習
8	発達障害児の特徴と支援について考え、発表する	講義、Gw	発達障害に関して予習・復習
9	特異的言語発達障害の概要、評価・支援について理解する	講義	SLIの予習・復習
10	学習障害の概要、評価について理解する①	講義	学習障害の予習・復習
11	学習障害の概要、評価について理解する②	講義	学習障害の予習・復習
12	これまでの講義の復習（中間テスト）	確認試験、解説	これまでの授業の復習
13	脳性まひの概要、評価、支援について理解する	講義	脳性まひの予習・復習
14	発達障害をもつ家族への対応	講義、GW	予習・復習
15	単位認定試験	試験	

■受講上の注意

言語発達障害学Ⅰの復習をしておくこと。

■成績評価の方法

評価対象：定期試験
評価基準：定期試験100%（60%／100%以上を合格とする）

■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学　言語発達障害学，第2版
言語聴覚士テキスト第3版，医歯薬出版

その他の参考資料は随時配付する

■備考

言語発達障害学Ⅲ

講師：雲井 未歓

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

概要：評価治療を行うための基本的なアプローチについて学ぶ。特に学習認知心理学・発達心理学の知識を踏まえた上で、言語発達支援に必要な考え方を理解する。
到達目標Ⅰ：支援する方法の基本的な考え方を学ぶ。
到達目標Ⅱ：行動主義的アプローチを理解する。
到達目標Ⅲ：認知言語学的アプローチを理解する

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床の基礎・流れについて学ぶ	講義	言語発達障害Ⅱの復習
2	評価・指導・支援について	講義	言語発達障害Ⅱの復習
3	行動主義的アプローチ （心理学の基礎）	講義	予習
4	行動主義的アプローチの種類	講義	予習
5	行動主義的アプローチの実際	演習	予習・復習
6	行動主義的アプローチの実際	演習	予習・復習
7	認知言語的アプローチ （発達心理学の基礎）	講義	予習
8	認知言語的アプローチの種類	講義	予習
9	認知言語的アプローチの実際 （S-S法）	演習	予習
10	認知言語的アプローチの実際 （大田ステージ）	演習	予習
11	インリアルアプローチについて学ぶ	講義	予習
12	AACについて学ぶ	講義	予習
13	質問－応答関係について学ぶ	講義	予習
14	支援の現状について学ぶ	演習	予習・復習
15	支援を行う上で大切なことを学ぶ	講義	予習・復習

■受講上の注意
言語発達障害学の総括。言語発達学・発達心理学・学習認知心理学の知識を復習する。小テストやプレゼンテーション練習を実施するが評価は定期試験で行う。

■成績評価の方法
評価対象：定期試験
評価基準：定期試験100%

■テキスト参考書など
言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
言語聴覚士テキスト第2版，医歯薬出版
その他の参考資料は随時配付する。

■備考

言語発達障害学Ⅳ

講師：冨山 翔太、雲井 未歓

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

概要：評価治療を行うための基本的なアプローチについて学ぶ。特に学習認知心理学・発達心理学の知識を踏まえた上で、言語発達支援に必要な考え方を理解する。
到達目標Ⅰ：支援する方法の基本的な考え方を学ぶ。
到達目標Ⅱ：行動主義的アプローチを理解する。
到達目標Ⅲ：認知言語学的アプローチを理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床の基礎・流れについて学ぶ	講義	言語発達障害Ⅱの復習
2	評価・指導・支援について	講義	言語発達障害Ⅱの復習
3	行動主義的アプローチ （心理学の基礎）	講義	予習
4	行動主義的アプローチの種類	講義	予習
5	行動主義的アプローチの実際	演習	予習・復習
6	行動主義的アプローチの実際	演習	予習・復習
7	認知言語的アプローチ （発達心理学の基礎）	講義	予習
8	認知言語的アプローチの種類	講義	予習
9	認知言語的アプローチの実際 （S-S法）	演習	予習
10	認知言語的アプローチの実際 （大田ステージ）	演習	予習
11	インリアルアプローチについて学ぶ	講義	予習
12	AACについて学ぶ	講義	予習
13	質問－応答関係について学ぶ	講義	予習
14	支援の現状について学ぶ 支援を行う上で大切なことを学ぶ	演習、講義	予習・復習
15	単位認定試験・解説	試験	

■受講上の注意

言語発達障害学の総括。言語発達学・発達心理学・学習認知心理学の知識を復習する。小テストやプレゼンテーション練習を実施するが評価は定期試験で行う。

■成績評価の方法

評価対象：定期試験
評価基準：定期試験100%（60%／100%以上合格）

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
言語聴覚士テキスト第2版，医歯薬出版
その他の参考資料は随時配付する。

■備考

言語発達障害学演習Ⅰ

講師：冨山 翔太

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

概要：小児領域で用いられる各検査の手技を学ぶ。グループワークやビデオ学習を多く取り入れる。
到達目標1：遠城寺式乳幼児分析的発達検査、PVT-Rができる。
到達目標2：S-S法・K-ABCⅡ・新版K式発達検査などについて知る。
到達目標3：WISC-Ⅳができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	遠城寺式・PVT-Rについて学ぶ	講義、演習	検査マニュアルを準備
2	＜S-S法＞の目的・特徴・手順	演習	検査マニュアルを準備
3	＜S-S法＞演習①	演習	検査マニュアルを準備
4	＜S-S法＞演習②	演習	検査マニュアルを準備
5	＜S-S法＞演習③	演習	検査マニュアルを準備
6	K-ABCⅡの目的・特徴・手順	演習	検査マニュアルを準備
7	K-ABCⅡ演習①	演習	検査マニュアルを準備
8	K-ABCⅡ演習②	演習	検査マニュアルを準備
9	新版K式発達検査の目的・特徴・手順	演習	検査マニュアルを準備
10	新版K式発達検査演習①	演習	検査マニュアルを準備
11	新版K式発達検査演習②	演習	検査マニュアルを準備
12	WISC-Ⅳの目的・特徴・手順	演習	検査マニュアルを準備
13	WISC-Ⅳ演習①	演習	検査マニュアルを準備
14	WISC-Ⅳ演習②	演習	検査マニュアルを準備
15	単位認定試験	試験	

■受講上の注意

積極的参加および予習・復習が必要である

■成績評価の方法

評価対象：定期試験、課題レポート
評価基準：定期試験80%　課題レポート20%　課題レポートは、①S-S法・K-ABCのビデオ学習によるレポートと②教科書の指定箇所のまとめである。

■テキスト参考書など

資料を配布する

■備考

言語発達障害学演習Ⅱ

講師：冨山 翔太

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

概要：言語発達障害領域の指導法①認知言語発達的アプローチ②TEACCHプログラムによるアプローチ③INREALによるアプローチの理論とそれを用いた指導の演習を行う。
到達目標1：認知言語発達的アプローチの指導法を知る。
到達目標2：TEACCHプログラムによるアプローチの理論と指導法を知る。
到達目標3：INREALによるアプローチの理論と指導法を知る。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	支援・指導の考え方を学ぶ	講義	障害学の復習
2	認知発達的アプローチ演習①	演習	予習・復習
3	認知発達的アプローチ演習②	演習	予習・復習
4	認知発達的アプローチ演習③	演習	予習・復習
5	TEACCHプログラム	演習	予習・復習
6	RDI対人関係発達指導法	演習	予習・復習
7	コミュニケーションの分析・実際の支援について	演習	予習・復習
8	歴史的背景と大人のかかわりの基本姿勢	演習	INREALの予習・復習
9	分析の方法と言語心理学的技法	演習	INREALの予習・復習
10	コミュニケーションの発達段階とあそび	演習	INREALの予習・復習
11	前言語期（聞き手効果段階）の評価と指導	演習	INREALの予習・復習
12	前言語期（意図的伝達段階）の評価と指導	演習	INREALの予習・復習
13	命題伝達段階（言語獲得期）の評価と指導	演習	INREALの予習・復習
14	会話の発達	演習	INREALの予習・復習
15	単位認定試験、解説	試験	

■受講上の注意

障害特性を十分理解して、対象となる子どものイメージができていないと難しい作業となります。言語発達障害学の復習・予習をしておくこと。

■成績評価の方法

評価対象：定期試験
評価基準：定期試験100%

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂
言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版
その他の参考資料は随時配付する

■備考

発声発語障害学Ⅰ

講師：福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

発声発語障害に関する基礎的な知識（解剖・生理・音声学等）や病態、その他、理論的背景や音声の一般的な記録法を学び、発声発語障害を全体的に捉えることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	話し言葉の障害と言語聴覚士が行う支援について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
2	発声発語障害の種類を知り、それぞれの違いについて理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
3	発声発語障害のそれぞれに応じた評価の視点について概論を学ぶ。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
4	発声発語障害のそれぞれの応じた支援の行い方の概論について学ぶ。「発話」における発声発語器官の各役割について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
5	構音発達の順序性について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：川元）
6	異常構音について理解する。（声門破裂音、咽喉頭摩擦音・破裂音、咽喉頭破裂音）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：川元）
7	異常構音について理解する。（側音化構音、口蓋化構音、鼻咽腔構音）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：川元）
8	構音の誤りについて理解する。（省略、置換、歪等）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：川元）
9	音声標記の方法を学ぶ（音声標記とは）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：川元）
10	音声標記の方法を学ぶ（記述方法）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：川元）
11	音声標記の方法を学ぶ（記述方法（小児サンプルの例を用いて））	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：川元）
12	Speech（発話）の評価について、理解する。発話明瞭度と自然度の理解、両者の関係について学ぶ。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
13	発話サンプルにおける音声学的記述法、聴取の行い方を学ぶ。（成人サンプルを用いて）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
14	発声発語器官の評価の行い方について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。（講義担当：小牧）
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験　100%

■テキスト参考書など

適宜、資料配布

■備考

特になし

発声発語障害学Ⅱ

講師：福元 恵美、川元 真由美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

発声発語障害のなかでも、主に小児に認められやすい機能性構音障害と、流暢性障害（吃音）に関する理論と治療方法について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	機能性構音障害概要の理解、母音・子音についての理解、構音検査時の記録の仕方について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
2	異常構音について理解する、構音検査の評価・診断の流れを理解する	講義	構音検査の予習・復習
3	異常構音を聞き、異常構音の記号を学ぶ，構音訓練の適応と訓練時の注意点について理解する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
4	構音訓練の仕方を学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
5	異常構音の訓練、その他の構音訓練について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
6	吃音者の体験談を踏まえ吃音の概要を理解できる	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
7	発達性吃音・獲得性吃音・クラタリングについて理解する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
8	吃音のメカニズムと疫学的データについて理解する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
9	吃音の理論的背景について理解する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
10	吃音の評価ができるようになる（重症度プロフィール、鑑別）	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
11	吃音検査法　第2版を学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
12	吃音評価のまとめができるようになる	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
13	吃音訓練を学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
14	吃音の支援について理解する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
15	単位認定試験・解説	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験において60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
構音障害の臨床　改訂第2版，金原出版
適宜資料を配布する

■備考

発声発語障害学Ⅲ

講師：冨山 翔太、徳永 弘樹

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

発声発語障害の中でも、主に成人分野についてに認められやすい口腔・中咽頭がん等で生じる器質性構音障害を理解する。また、喉頭病変、発声の困難さにより生じる音声障害について病態と訓練方法を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	口腔・中咽頭がん治療後に生じる器質性構音障害について学ぶ（概論）	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	口腔・中咽頭がん治療後に生じる器質性構音障害について学ぶ（評価方法について）	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	口腔・中咽頭がん治療後の構音訓練、補綴的治療について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	音声に関わる解剖生理、発声のメカニズム① 呼吸器・喉頭・声道の基礎知識について理解する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	音声に関わる解剖生理、発声のメカニズム② 呼吸器・喉頭・声道の基礎知識について理解する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	音声障害を引き起こす原因 分類と代表疾患について把握する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	喉頭の観察と音声障害 正常・各病態について整理する	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	音声の評価法 代表的な評価法について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	音声の検査法① 呼吸・発声機能検査について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	音声の検査法② 呼吸・発声機能検査について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	音声治療と訓練①　外科的・内科的治療、指導、訓練の種類と目的について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	音声訓練② 指導、訓練の種類と目的について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	無喉頭音声① 種類、特徴について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	無喉頭音声① 訓練について学ぶ	講義、GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
15	単位認定試験　解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験において60/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
独自の資料

■備考

発声発語障害学Ⅳ

講師：小牧祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

コミュニケーション障害分野において特に発現率が多いDysarthriaについて基礎知識の習得、生じうる疾患を理解して、運動障害による発話運動の異常性の理解し、評価・訓練法を習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	運動障害性構音障害の病態、定義を理解し、タイプ分類について学ぶ。また、症例VTRより全体像を掴めるようにする。	講義	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する（皮質延髄路両側性障害について）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。発話特徴を理解する為、講義中、適宜リスニングを実施します。
3	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する（皮質延髄路一側性障害について）	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。発話特徴を理解する為、講義中、適宜リスニングを実施します。
4	下位運動ニューロン障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。発話特徴を理解する為、講義中、適宜リスニングを実施します。
5	仮性球麻痺・球麻痺の違いについて理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。発話特徴を理解する為、講義中、適宜リスニングを実施します。
6	錐体外路障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。発話特徴を理解する為、講義中、適宜リスニングを実施します。
7	小脳障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。発話特徴を理解する為、講義中、適宜リスニングを実施します。
8	運動系多重障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。発話特徴を理解する為、講義中、適宜リスニングを実施します。
9	実在症例VTRより患者状態の把握・理解を行う。（発話症状について）	講義・演習	VTR視聴後にグループワークを中心に行う。
10	実在症例VTRより患者状態の把握・理解を行う。（運動症状について）	講義・GW	VTR視聴後にグループワークを中心に行う。
11	Dysarthriaの評価の概論について学ぶ。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	タイプ分類における判断ポイント、判断根拠について理解する。	講義・GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。	講義・GW	Dysarthriaの治療アプローチについて学ぶ。
14	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。	講義・GW	Dysarthriaタイプ毎の治療ガイドラインを学ぶ。
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験　100%

■テキスト参考書など

西尾正輝著「ディサースリア臨床標準テキスト」医歯薬出版株式会社
独自の資料（発話特徴を生じさせているメカニズムに関する別表）

■備考

特になし

スピーチリハビリテーション演習Ⅰ

講師:戌亥 啓一

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

機能性構音障害、器質性構音障害、流暢性障害(吃音)について、共通する項目と各障害に応じた評価・治療について実際の検査や機械を用いて演習を行い、各障害に対して適切な対応が行える臨床技能を習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	各障害のタイプに応じた臨床(評価)の流れについて理解する	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	機能性構音障害の評価を理解する(構音検査①)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	機能性構音障害の評価を理解する(構音検査②)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	機能性構音障害の評価を理解する(構音検査③)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	機能性構音障害の訓練方法を理解する(聴覚弁別訓練など)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	機能性構音障害の訓練方法を理解する(漸次接近法など)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	流暢性障害に対いて、吃音検査法の実施方法を学ぶ①	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	流暢性障害に対いて、吃音検査法の実施方法を学ぶ②	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	流暢性障害に対する訓練方法を学ぶ(流暢性促進技法、随意吃など)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	器質性構音障害に対する鼻咽腔閉鎖機能の評価を学ぶ①	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	器質性構音障害に対する鼻咽腔閉鎖機能の評価を学ぶ②	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	器質性構音障害に対する機器を用いた検査法を学ぶ	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	器質性構音障害の訓練方法を学ぶ(代償的構音方法等について)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	まとめ(総合評価)	講義・GW	演習とグループワークを適宜切り替えて行う。
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験において60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂
構音障害の臨床　改訂第2版, 金原出版
適宜資料を配布する

■備考

スピーチリハビリテーション演習Ⅱ

講師：小牧祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

Dysarthriaの発話特徴を理解し、標準ディサースリア検査（AMSD）を通して発声発語器官評価の具体的な実施方法を学ぶ。また、治療にあたり発声発語器官への徒手的介入方法、発話の調整手法を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発声発語器官への評価と介入意義について学ぶ。AMSDの実施概要を学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う。（呼吸・発声機能）	演習	AMSDに必要な道具を準備すること。（道具の詳細は第1講で述べる）
3	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う。（鼻咽腔閉鎖機能・口腔構音機能）	演習	AMSDに必要な道具を準備すること。（道具の詳細は第1講で述べる）
4	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う。（詳細な計測や補助検査、プロフィールの書き方について）	演習	AMSDに必要な道具を準備すること。（道具の詳細は第1講で述べる）
5	実技テスト（AMSD実技評価・レポート評価）①	演習	AMSDに必要な道具を準備し、白衣（KC）を着用すること。
6	実技テスト（AMSD実技評価・レポート評価）②	演習	AMSDに必要な道具を準備し、白衣（KC）を着用すること。
7	発声発語器官の徒手的治療（体幹、臥位姿勢）を理解する。	演習	動ける格好を準備すること。
8	発声発語器官の徒手的治療（呼吸機能）を理解する。	演習	動ける格好を準備すること。
9	発声発語器官の徒手的治療（発声機能）を理解する。	演習	動ける格好を準備すること。
10	実在症例VTRより患者状態の把握・理解を行う。（運動症状について）	演習	特になし
11	発声発語器官の徒手的治療（鼻咽腔閉鎖機能）を理解する。	演習	特になし
12	発声発語器官の徒手的治療（口腔構音器官）について学ぶ	演習	特になし
13	構音訓練、代償的スピーチ法について理解し、実践出来る。	演習	特になし
14	模擬症例に対して、適切な訓練プログラムを立案する。	演習	特になし
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

実技テスト（AMSD実技評価・レポート）30%　単位認定試験（筆記）70%

■テキスト参考書など

西尾正輝著「ディサースリア臨床標準テキスト」医歯薬出版株式会社
独自の資料

■備考

特になし

嚥下障害学Ⅰ

講師:川元 真由美

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

昨今、高齢社会に伴い嚥下障害は社会的な問題となっている。言語聴覚士は、医師または歯科医師の指示のもとに、診療の補助として嚥下訓練を実施でき、嚥下訓練の実施が法的に明記されている唯一の専門職である。本講義では、摂食・嚥下の基礎である解剖・生理から嚥下モデル、嚥下障害を生じうる疾患や病態について学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害の概要を理解できる	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
2	嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する①(口腔・咽頭を中心に)	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
3	嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する②(喉頭・食道まで)	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
4	咀嚼の生理と神経機構について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
5	嚥下モデルについて理解する①(5期)	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
6	嚥下モデルについて理解する②(5期、プロセスモデル)	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
7	嚥下モデルについて理解する③(プロセスモデル)	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
8	摂食・嚥下に関わる呼吸・咳の生理と神経機構について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
9	年齢による嚥下状態の変化を理解する(小児、高齢者嚥下(機能低下、服薬の影響)について)	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
10	誤嚥の分類を理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
11	嚥下障害を起こす疾患について理解する①(運動障害性(神経系))	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
12	嚥下障害を起こす疾患について理解する②(器質性・機能性)	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
13	高次脳、認知症etcの問題に伴う摂食・嚥下障害について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
14	摂食・嚥下障害の合併症について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験において60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布する

■備考

嚥下障害学Ⅱ

講師：川元 真由美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査を中心とする摂食・嚥下障害の各種検査法と評価法について学び、適切な治療方針を選択できるようになる事を目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食・嚥下の動態の理解を深める（復習含む）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
2	理学的所見の解釈について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
3	水飲み検査・反復唾液のみ検査、フードテストについて学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
4	パルスオキシメーターの見方、着色水テスト、唾液分泌検査について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
5	不顕性誤嚥を測れる検査、研究的意味合いの強い検査について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
6	嚥下造影検査を理解する①（機器について）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
7	嚥下造影検査を理解する②（動画の見方について）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
8	嚥下造影所見の解釈について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
9	嚥下内視鏡検査について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
10	頸部聴診法について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
11	摂食・嚥下障害のリハビリテーションの概要について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
12	嚥下障害の重症度分類について学ぶ（藤島のグレードを参考に）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
13	嚥下障害患者に応じた食事形態について学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
14	これまでの講義のまとめを行い、理解を深める	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験において60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布する

■備考

嚥下障害学演習

講師：川元 真由美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、嚥下障害患者に応じた訓練方法を理解し、患者タイプ毎の訓練方法の選定と実践が行える事を目標とする。また、昨今の知見から嚥下障害患者を取り巻くチームアプローチの理解や、外科手術による嚥下障害の予防などを模擬症例を通したディスカッション等により学ぶ

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	嚥下障害患者への評価手順の理解を深める（復習含む）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
2	間接嚥下訓練について理解する①（呼吸器官訓練、発声機能訓練、鼻腔閉鎖機能訓練、口腔構音器官）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
3	間接嚥下訓練について理解する②(口腔ケア、サーマルスティミュレーション、頸部挙上訓練、バルーン法）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
4	直接嚥下訓練について理解する①(息こらえ嚥下、K-point刺激訓練、メンデルスソン手技）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
5	直接嚥下訓練について理解する②(努力嚥下、頸部回旋、一側嚥下、交互嚥下、一口量の調整、複数回嚥下）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
6	嚥下障害における代償法について理解する。	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
7	食事の際の観察視点、姿勢について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
8	歯科補綴的治療、疾患別介入について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
9	頭頸部腫瘍により生じる嚥下障害へのリハビリ介入について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
10	患者の栄養管理について理解する（IVH、経管栄養について）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
11	チーム医療とNST、吸引について理解する	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
12	嚥下障害の外科治療について理解する（誤嚥防止術、嚥下機能改善術）	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
13	模擬症例を用いた、検査～訓練までの立案を学ぶ	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
14	最新の治療や研究報告について論文検索を実施し、報告を行う	講義 GW	講義とグループワークを適宜切り替えて行う
15	単位認定試験・解説		

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験において60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布する

■備考

聴覚障害学Ⅰ

講師:戌亥 啓一

単位数:1単位	時間数:30時間	授業学年:2学年
必修選択:必修		

■科目目標

聴覚一般および聴覚障害に関連する既習事項を統合的に理解し、言語聴覚士としての臨床活動に活用できる知識・技術として習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害とそれを取り巻く情勢の概要について理解を深める。	講義	事前配付資料の通読及び確認
2	聴覚障害に関わる社会的トピックについて知る①	講義	事前配付資料の通読及び確認
3	コミュニケーションモードの概要を理解する。	講義	事前配付資料の通読及び確認
4	聴覚保障について概要を知る。	講義	事前配付資料の通読及び確認
5	聴覚保障の体験を通して理解を深める①	講義	事前配付資料の通読及び確認
6	聴覚保障の体験を通して理解を深める②	講義	事前配付資料の通読及び確認
7	聴覚障害に関わる社会的トピックについて知る②	講義	事前配付資料の通読及び確認
8	聴覚障害教育の概要について理解を深める。	講義	事前配付資料の通読及び確認
9	高等教育現場での情報保障について理解を深める。	講義	事前配付資料の通読及び確認
10	乳幼児・小期聴覚障害の特徴について理解を深める。	講義	事前配付資料の通読及び確認
11	高齢期聴覚障害の特徴について理解を深める。	講義	事前配付資料の通読及び確認
12	聴覚保障の体験を通して理解を深める③	講義	事前配付資料の通読及び確認
13	聴覚障害に関わる社会保障について理解を深める。	講義	事前配付資料の通読及び確認
14	まとめと今後の展開について知る。	講義	事前配付資料の通読及び確認
15	試験および解説	試験	

■受講上の注意

＊授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

試験、提出物

■テキスト参考書など

配付資料、関連解剖書籍

■備考

聴覚障害学Ⅱ

講師：牛迫 泰明

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

小児の難聴や難聴（リ）ハビリテーションについて具体的に学習することにより、聴覚医学を理解することができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	耳のつくりと働きについて理解を再確認する	講義	基礎的知識であることを認識し、繰り返し学習すること
2	小児難聴の原因について理解する ①遺伝性難聴	講義	遺伝について学習する
3	②伝音性難聴 ③感音性難聴 を来たす疾患を学習する	講義	難聴の質的違いを理解する
4	小児難聴の評価：乳幼児聴力検査を通して	講義、実習	新生児から小児まで、様々な方法について学習する
5	小児難聴と言語発達について：聴力障害と言語発達遅滞	講義	成人難聴と小児難聴の違いをしっかりと確認する
6	難聴児の（リ）ハビリテーションについて	講義	（リ）ハビリテーションを体系的に学習する
7	難聴児の聴能言語訓練の実際	講義、DVD	聴能・言語訓練の実際を体系的に学習する
8	補聴器：つくりと働きについて	講義	「補聴器とは？」を理解する
9	補聴器の種類：特にデジタル補聴器の機能について	講義	補聴器の最新技術とその効果について学習する
10	補聴器の適応について	講義	聴覚補償対象について学習する
11	補聴器の適合について	講義	機械を人間に適合する。その方法を学習する
12	最新の人工聴覚器について	講義	聴覚障害に応じて様々な人工聴覚器が開発されている。それらの知識について学習する
13	人工内耳：つくりと働きについて	講義	人工内耳のしくみと働きについて理解する
14	人工内耳：適応と適合、効果について	講義	人工聴覚器の適応と適合、その効果を理解する
15	試験とまとめ	筆記試験	14回の講義内容について筆記試験を行う

■受講上の注意

前回講義内容を学習した上で講義に参加する

■成績評価の方法

試験（50%）、授業への参加態度（50%）により総合的に評価する

■テキスト参考書など

指定テキストはない

■備考

資料プリントは各講義毎に配付する

聴覚障害学Ⅲ

講師:戌亥 啓一、良久 万里子

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:3学年

必修選択:必修

■科目目標

・視覚聴覚二重障害者を理解し，視覚聴覚二重障害者とのコミュニケーションスキルを高め る。
・視覚聴覚二重障害者の困難やニーズに対してのサポート力を高める。
・その他、聴覚分野に関する理解を総合的に深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	視覚聴覚二重障害の定義	講義	
2	視覚聴覚二重障害者のコミュニケーション手段	講義	
3	視覚聴覚二重障害者の困難とニーズ	講義	
4	視覚聴覚二重障害者の実態	講義	
5	視覚聴覚二重障害者の移動介助方法	講義	
6	視覚聴覚二重障害者の福祉サービス．関連機関との連携	講義	
7	視覚聴覚二重障害者のサポート方法・訓練	講義	
8	中間評価と説明	講義	
9	聴覚分野研究レポート①	講義	
10	聴覚分野研究レポート②	講義	
11	聴覚分野研究レポート③	講義	
12	総論まとめ①	講義	
13	総論まとめ②	講義	
14	総論まとめ③	講義	
15	試験・解説	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

筆記試験

■テキスト参考書など

配付資料

■備考

聴覚障害学演習Ⅰ

講師:松田 悠佑

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:2学年

必修選択:必修

■科目目標

聴覚検査結果の特徴から、難聴の種類とその特徴を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	必要知識の確認	講義	試験を行う
2	聴覚検査全般	講義	聴覚検査の必要性を理解する
3	標準純音聴力検査	講義	検査の概要を理解する
4	マスキング	講義	検査手法を理解する
5	演習	演習	検査機器に触れる
6	演習	演習	検査方法を理解する
7	演習	演習	検査を行う
8	語音聴力検査	講義	検査の概要を理解する
9	演習	演習	検査を行う
10	Tympanometory, sound reflex	講義	検査の概要を理解する
11	演習	演習	検査機器に触れる
12	演習	演習	検査を行う
13	総括	講義	講義内容の総復習
14	総括	講義	講義内容の総復習
15	総括	講義	講義内容の総復習

■受講上の注意

なし

■成績評価の方法

レポート(100%)

■テキスト参考書など

資料を配布する
テキスト:聴覚検査の実際

■備考

グループで課題に取り組む

聴覚障害学演習Ⅱ

講師:戌亥 啓一、徳永 弘樹

単位数:1単位　時間数:30時間　授業学年:3学年

必修選択:必修

■科目目標

各種聴覚検査についてその目的や特徴を把握し、分類に精通する。講義は概略の解説および演習を通して実施・進行していく。オージオグラム、オージオメータの用語・単位・原理についての理解、また各検査名とさまざまな区分についてその根拠から整理・理解していく。目標として、聴覚障害学演習Ⅰをもとにした基礎知識の基礎的な手技の習熟を目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オージオメータを操作し聴覚図を描くことができる	演習	
2	各種検査音とその特徴について説明できる	演習	
3	音場検査について説明を実施できる	演習	
4	自覚的聴覚検査の種類と特徴を説明できる	演習	
5	他覚的聴力検査の種類と特徴について説明できる	演習	
6	目的別聴力検査の種類と特徴について説明できる	演習	
7	小児聴力検査の種類と特徴について説明できる	演習	
8	中間評価と説明の実施	演習・講義	
9	VRAを実施する	演習	
10	乳幼児他覚的聴力検査の解析と応用	講義	
11	補聴器の特性について理解する	演習	
12	実耳測定について理解する	演習	
13	補聴器適合検査の指針2010の流れを把握する	講義	
14	補聴器適合検査の指針2010を理解する	演習	
15	単位認定試験とその説明	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

レポートと単位認定試験にて総合的に評価します

■テキスト参考書など

立木　孝:聴覚検査の実際 3版　日本聴覚医学会　編, 南山堂

■備考

聴覚障害学特論Ⅰ

講師:戌亥 啓一

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:4学年
必修選択:必修		

■科目目標

聴覚解剖から聴覚障害に関連する既習事項を統合的に理解し、言語聴覚士としての臨床活動に活用できる知識・技術として習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚の解剖・機能について再認識する	講義	事前配付資料を通読すること
2	聴覚と言語との密接で重要な関連について再認識する1)	講義	事前配付資料を通読すること
3	聴覚と言語との密接で重要な関連について再認識する2)	講義	事前配付資料を通読すること
4	聴覚の病態について、聴覚系の構造・機能と対応付けて理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
5	聴覚の病態について、聴覚系の構造・機能と対応付けて理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
6	純音聴力検査、語音聴力検査等を題材として、妥当性・信頼性の高い測定の重要性を理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
7	純音聴力検査、語音聴力検査等を題材として、妥当性・信頼性の高い測定の重要性を理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
8	試験・解説		

■受講上の注意

＊授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

試験

■テキスト参考書など

配付資料

■備考

聴覚障害学特論Ⅱ

講師:戌亥 啓一

単位数:1単位	時間数:15時間	授業学年:4学年
必修選択:必修		

■科目目標

聴覚障害特論Ⅰとともに聴覚障害に関連する既習事項を統合的に理解し、言語聴覚士としての臨床活動に活用できる知識・技術として習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ABR検査、OAE等を題材として、聴覚系の構造・機能と対応づけてた測定原理や結果の分析方法を理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
2	ABR検査、OAE等を題材として、聴覚系の構造・機能と対応づけてた測定原理や結果の分析方法を理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
3	補聴器と人工内耳を対比させ聴覚補償機器としての共通性および特殊性について理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
4	補聴器と人工内耳を対比させ聴覚補償機器としての共通性および特殊性について理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
5	母語獲得前発症児、中途発症者、加齢性発症者への専門的対応方法について理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
6	母語獲得前発症児、中途発症者、加齢性発症者への専門的対応方法について理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
7	先天性二重障害児への発達支援の意義について考察し、その重要性を理解する	講義	事前配付資料を通読すること
8	試験・解説		

■受講上の注意

＊授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

試験

■テキスト参考書など

配付資料

■備考

臨床実習Ⅰ

講師：専任教員

単位数：4単位　時間数：160時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

①臨床実習Ⅰは、3年次に行う臨床現場での実習である。初めてSTのもとで、リハビリテーション・言語聴覚療法の実際（評価・訓練計画）および職業人・社会人としての態度を学ぶ。
②指導者と対象者及びその家族との関わり方を通して、臨床家として適する態度・接遇を学ぶ。
③対象者を全体的に把握するために必要な情報収集、及び評価（観察・面接・検査等）の実際を体験する。
④評価に基づいた問題点抽出、目標（長期及び短期）の設定、および対象者の病態像を考察する。ポイントを押さえた評価報告書を作成する。等の目標がある。
詳しくは臨床実習マニュアルを参照のこと。

■科目内容

■学習のねらい

＊内容は上記の実習目標に準ずる。
実習期間
実習期間は160時間（約20日間）である。追加・補充等の場合はその限りでない。
実施計画（例）　※施設・症例毎に計画は異なる。
1週目
　院内オリエンテーション
　ST訓練見学→見学レポート作成
　担当症例選択

2週目
　ST訓練見学→見学レポート作成
　担当症例に対する言語評価

3～4週目
　担当症例に対する評価・訓練の立案・実施
　レジメ発表

実習後セミナー
　発表会での実習報告

■方法

実習

■学習上の留意点

■受講上の注意

臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。

■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価による。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル
言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

臨床実習Ⅱ

講師：専任教員

単位数：8単位　時間数：320時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

①指導者の指導を受けながら対象者の評価・治療計画の立案、具体的治療の実施、その記録・報告、再評価など、STとしての一貫した治療行為を習得する。
②STとしての管理運営業務を学ぶ。
③対象者に対する総合的リハビリテーションサービスの中における言語聴覚療法の意義を考える。
④社会人・医療人としての態度を身につける。

■科目内容

■学習のねらい

実習期間
実習期間は320時間（約40日間）である。追加・補充等の場合はその限りでない。
実施計画（例）　※施設・症例毎に計画は異なる。
実習のプログラム（例）
・実習オリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要
・服務規定の説明
・リハビリテーション部の紹介
・症例実習に伴う諸注意
・対象者の評価・問題点抽出・訓練立案
・中間発表
・訓練実施
・再評価、最終レポート作成
休日は実習施設に応じる（土曜日も実習日となる可能性がある）
現在，日曜リハを行う施設が増加しているため，日曜日の出勤や学会への
参加も想定される。

■方法

■学習上の留意点

■受講上の注意

臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。

■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価による。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル
言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

文章作成

講師:川元 真由美

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:1学年

必修選択:選択必修

■科目目標

言語聴覚士として自己の意見を文章化し、いかに読み手に誤解なく伝えられるか。これは必要な臨床技術のひとつである。
本講義では文章でのコミュニケーション能力、文章を読み解く力と作成する力を育成し、論理的思考力を高めることを目的とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	語彙・文法について理解できる	講義	関連する部分を読んでおく。
2	資料分析法について理解できる	講義	関連する部分を読んでおく。
3	レポートの書き方について理解できる	講義	関連する部分を読んでおく。
4	文章読解・要約の方法について理解する	講義	関連する部分を読んでおく。
5	手紙文の書き方のポイントを理解する	講義	関連する部分を読んでおく。
6	意見文の書き方を理解する	講義	関連する部分を読んでおく。
7	論説文の書き方を理解する	講義	関連する部分を読んでおく。
8	まとめ	講義	関連する部分を読んでおく。

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

各講義後の提出物と最終課題にて評価する。

■テキスト参考書など

基礎から学べる！ 文章力ステップ 準2級対応
適宜資料を配布する

■備考

学びの技法

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：選択必修		

■科目目標

【一般目標】
・高等教育における講義スタイルと学習の方向性を理解する
【到達目標】
・主体的に学ぶ姿勢を身に着ける
・講義の聞き方が理解できる
・ノートの取り方がわかる
・レポートの書き方がわかる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	主体的になる必要性を理解する	講義・TBL	講義を聞き、他者と自分自身の意見を相互交換することを体験してもらいます
2	「詳読」の意味と方法を知ることができる	講義	
3	文章を書くことで何文章を書くことで何が得られるか理解できる。	講義	
4	レポートの書き方を理解する	講義	
5	知的所有権について理解できる	TBL	学習のねらいに基づいてチームで課題に取り組んでもらいます
6	プレゼンテーションの技術を理解することができる	講義・TBL	各グループにてプレゼンテーションを体験します
7	まとめ	講義・TBL	
8	レポート作成		

■受講上の注意

講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行ってください。各講義の後にリフレクションカードの作成と提出をしていただきます。

■成績評価の方法

リフレクションカードの内容評価（60点）、レポート（40点）で総合的に評価します。

■テキスト参考書など

■備考

ライフサイエンス入門

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：1学年

必修選択：選択必修

■科目目標

言語聴覚士として従事するためには多岐に渡る知識が必要である。また臨床の場において、患者に対し臨床的評価を行う際、様々な視点が必要となってくる。これは常に勉学に励むことが必要であり、何事にも探究心を持ちながら生活することが、言語聴覚士としての資質を上げていくことに繋がる。本科目は、言語聴覚士になるうえで必要な知識には何が必要かを考え、それを知ることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	国家試験に出題される科目を知る	TBL	チーム（グループ）にて講義を実施する
2	国家試験に出題される科目の必要性を知る	TBL	チーム（グループ）にて講義を実施する
3	ヒトの機能について知る	TBL	チーム（グループ）にて講義を実施する
4	ヒトの機能について知る	TBL	チーム（グループ）にて講義を実施する
5	生活の中の疑問について調べることができる	PBL	
6	生活の中の疑問について調べることができる	PBL	
7	生活の中の疑問について調べることができる	PBL	
8	生活の中の疑問について調べることができる	PBL	

■受講上の注意

ディスカッションを主体とした講義となるため、積極的な参加を期待する。

■成績評価の方法

終講後、一週間以内にレポートを提出し、その内容によって判定する。秀・優・良・可・不可にて判定し、不可の場合は再試験として再レポートを求める。

■テキスト参考書など

配布資料

■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)
TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

症例演習Ⅰ

講師：福元 恵美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：選択必修		

■科目目標

言語発達障害児の評価・診断は1）ことばに関連する諸側面の状態を明らかにする。2）障害の原因の推定。3）具体的目標の設定。4）長期的展望を提起するために行われる。
本講義では正常発達など情報収集に必要な知識をもとに、適切な検査を選択し、実施できることを目標にする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	構音検査について理解できる	講義	構音検査マニュアルを準備すること
2	構音検査の実施方法を理解できる	講義・演習	構音検査マニュアルを準備すること
3	構音検査を実施できる	演習	構音検査マニュアルを準備すること 構音検査道具・検査用紙を準備すること
4	構音検査を実施できる	演習	構音検査マニュアルを準備すること 構音検査道具・検査用紙を準備すること
5	個人情報保護について理解できる 構音検査を実施できる	講義、演習	構音検査マニュアルを準備すること 構音検査道具・検査用紙を準備すること
6	PVT-Rについて理解できる、PVT-Rを実施できる	講義・演習	PVT-Rマニュアルを準備しておく。 PVT-R検査道具・検査用紙を準備しておく
7	しらゆきこども園での演習に向けたオリエンテーションを行う	講義	構音検査、PVT-Rの復習をしておく
8	構音検査・PVT－Rを実施できる	演習	構音検査道具・記録用紙を準備しておくこと。PVT－Rの検査道具・記録用紙を準備しておくこと
9	構音検査・PVT－Rを実施できる	演習	構音検査道具・記録用紙を準備しておくこと。PVT－Rの検査道具・記録用紙を準備しておくこと
10	構音検査・PVT－Rを実施できる	演習	構音検査道具・記録用紙を準備しておくこと。PVT－Rの検査道具・記録用紙を準備しておくこと
11	構音検査・PVT－Rを実施できる	演習	構音検査道具・記録用紙を準備しておくこと。PVT－Rの検査道具・記録用紙を準備しておくこと
12	しらゆきこども園で検査を実施する	演習	構音検査道具・記録用紙を準備しておくこと。PVT－Rの検査道具・記録用紙を準備しておくこと
13	しらゆきこども園で検査を実施する	演習	構音検査道具・記録用紙を準備しておくこと。PVT－Rの検査道具・記録用紙を準備しておくこと
14	構音検査、PVT－Rの検査結果をまとめることができる	演習	構音検査用紙、PVT-Rの評価用紙を持ってくる。構音検査、PVT-Rのマニュアルを持ってくる
15	構音検査、PVT－Rの検査結果をまとめることができる	演習	構音検査用紙、PVT-Rの評価用紙を持ってくる。構音検査、PVT-Rのマニュアルを持ってくる

■受講上の注意

学外演習も兼ねている為、言葉遣いや身なりに特に気をつけること。

■成績評価の方法

評価対象：検査用紙、レポート
評価基準：演習時の検査内容90%、レポート10%（提出期限を守れなかった場合－5%）とする。

■テキスト参考書など

随時配布予定

■備考

症例演習Ⅱ

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

＜一般目標＞
言語発達障害の支援に活用するための適切な評価ならびに診断ができる。
家族（特に母親）支援に際して、援助者としてどのような態度が必要かを身に付ける。
＜到達目標＞
（1）こどもの正常発達について概説することができる。
（2）支援に必要な教材を作成・選択することができる。
（3）全体像を観察および検査により把握することができる。
※単位未修得の者は当該学年の実習が出来ない事もある。

■科目内容

■学習のねらい

【概　要】
本講義では、原田学園ことばの支援センターの利用者の協力のもと、こどもの支援に関しての知識・技術の獲得を目的としている。
学生の見学ならびに訓練補助について、保護者から同意の得られた利用者を対象に実施する。
履修学生は、個人情報保護法に関する講義を事前教育にて受ける必要がある。
原田学園ことばの支援センターの使用については、別途計画を通知する。

【計　画】
1．事前教育：
個人情報保護に関して学習する。
代表的な言語発達障害の特性と、観察のポイントを学習する。
実施場所　ST3年教室・原田学園ことばの支援センター
2．訓練見学：
学生5～8名を1グループとし、言語聴覚士の支援内容を見学する。
実施場所　原田学園ことばの支援センター
3．検討会の開催：
見学した児に対して、言語症状の把握、STの支援内容、訓練内容の立案について、グループにて討議する。討論を踏まえ、症例報告書を作成・提出する。
実施場所　ST3年教室・原田学園ことばの支援センター
4．検査および訓練の補助を体験：
STの指導のもと訓練補助者として検査・訓練に参加する。
実施場所 原田学園ことばの支援センター

■方法

演習

■学習上の留意点

■受講上の注意

■成績評価の方法

症例報告書ならびに、症例演習に対しての取り組み等をふまえ全体的に評価する。

■テキスト参考書など

これまでの講義にて使用した資料やテキストを用意しておくこと。

■備考

地域連携

講師：松尾 康弘、高吉 進

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：3学年

必修選択：選択必修

■科目目標

厚生労働省は、団塊の世代が75歳以上となる2025年をめどに、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供させる地域包括ケアシステムの構築を実現していくとしている。つまり、院内の支援から地域での支援に移行しつつある。本科目は、地域包括ケアシステムとそれに係る言語聴覚療法について理解することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	今後の人口推移について理解できる	講義・PBL	公衆衛生学およびリハビリテーション医学の復習をしておくこと
2	介護保険制度の中の言語聴覚療法について理解できる	講義・PBL	厚生労働省ホームページを確認しておくこと
3	地域と文化および高齢者の関係について理解できる	講義・PBL	厚生労働省ホームページを確認しておくこと
4	地域包括ケアシステムの概要について理解できる	講義・PBL	厚生労働省ホームページを確認しておくこと
5	地域包括ケアシステムとリハビリテーションの関係について理解できる	講義・PBL	厚生労働省ホームページを確認しておくこと
6	地域包括ケアシステムと言語聴覚士の関係について理解できる	講義・PBL	
7	地域ケア会議について理解できる	TBL・PBL	
8	地域ケア会議を体験する	TBL・PBL	

■受講上の注意

ディスカッションを主体とした講義となるため、積極的な参加を期待する。

■成績評価の方法

終講後、一週間以内にレポートを提出し、その内容によって判定する。優・良・可・不可にて判定し、可以上を合格とする。

■テキスト参考書など

必要に応じ資料を配布する。

■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)
TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

言語聴覚療法管理論

講師：藤井 達也、原口 友子、専任教員

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：4学年

必修選択：選択必修

■科目目標

【一般目標】

医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知識を得る事ができる。

【到達目標】

・職能団体について理解する。
・言語聴覚療法における産学官について理解する。
・言語聴覚士の開業について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	職能団体について理解できる	講義・TBL	日本言語聴覚士協会HPを確認しておく
2	職能団体について理解できる	講義・TBL	日本言語聴覚士協会HPを確認しておく
3	職能団体について理解できる	講義・TBL	日本言語聴覚士協会HPを確認しておく
4	言語聴覚療法における産学連連携について理解できる	講義・TBL	
5	言語聴覚療法における産学連連携について理解できる	講義・TBL	
6	言語聴覚士における開業への可能性について理解することができる	講義・TBL	
7	言語聴覚士における開業への可能性について理解することができる	講義・TBL	
8	言語聴覚士における開業への可能性について理解することができる	講義・TBL	

■受講上の注意

ディスカッションを主体とした講義となるため、積極的な参加を期待する。

■成績評価の方法

終講後、一週間以内にレポートを提出し、その内容によって判定する。優・良・可・不可にて判定し、不可の場合は再試験として再レポートを求める。

■テキスト参考書など

配布資料

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）
開講される講義の内容・日時等は講師の都合により年度ごとに変更されることがある。

言語聴覚研究

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：選択必修		

■科目目標

高度専門士を目指す学生としてとして研究法を理解することは必須である。4年次や卒業後に行う研究を円滑に進めるにあたって言語聴覚研究の基礎を理解したい。
①適切な日本語を使用し文章表現ができる。
②論文の構成を理解する。
③既存の論文や教科書を引用・参考できる。
④事実を基に考察できるようになる。
⑤知的探究心を持ち、表現できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	研究とは	講義	
2	テーマ立案	講義	
3	企画書の作成	演習	担当教員の指導を受けること
4	企画書の作成	演習	担当教員の指導を受けること
5	企画書の作成	演習	担当教員の指導を受けること
6	企画書の作成	演習	担当教員の指導を受けること
7	データ採取	演習	担当教員の指導を受けること
8	データ採取	演習	担当教員の指導を受けること
9	データ採取	演習	担当教員の指導を受けること
10	データ採取	演習	担当教員の指導を受けること
11	論文作成（レジュメを含む）	演習	担当教員の指導を受けること
12	論文作成（レジュメを含む）	演習	担当教員の指導を受けること
13	プレゼンテーションスライド作成	演習	担当教員の指導を受けること
14	研究発表	演習	担当教員の指導を受けること
15	研究発表	演習	担当教員の指導を受けること

■受講上の注意

本科目は担当教員との個別指導も実施される。

■成績評価の方法

発表会における発表内容等にて評価する。

■テキスト参考書など

■備考

卒業研究Ⅰ

講師:専任教員

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:3学年

必修選択:選択必修

■科目目標

各教員の指導のもとオリエンテーションの実施し、テーマ及び実験計画の立案を決定する過程を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	テーマの検討方法を知る	講義	興味関心に留意する
2	テーマの候補を挙げる 文献検索の方法を知る	講義	過去の研究の重要性を認識する
3	テーマを選定する	講義	計画的に見通しを持った選定とは
4	テーマを決定する	講義	計画的に見通しを持った選定とは
5	計画・方法等の検討方法を学ぶ	講義	信頼性、妥当性を踏まえた観点に留意する
6	計画・方法等の検討方法を学ぶ	講義	信頼性、妥当性を踏まえた観点に留意する
7	計画を文面化する手段を知る	講義	他者にわかりやすい表現を検討する
8	計画をプレゼンテーションする手段を知る	講義	他者にわかりやすい表現を検討する

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

計画発表の評価:方法、評価基準などは講義にて提示します。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考

卒業研究Ⅱ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：3学年

必修選択：選択必修

■科目目標

研究計画、データ取得、論議の進め方を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	文献検索法をよく確認する
2	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	指導者との進捗状況を確認すること
3	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	指導者との進捗状況を確認すること
4	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
5	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
6	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
7	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
8	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

計画発表の評価：方法、評価基準などは講義にて提示します。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考

卒業研究Ⅲ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：4学年

必修選択：選択必修

■科目目標

指導者とともに関係論文や専門書について議論を行い、信頼性・妥当性を意識した研究計画の適宜修正、着実な実行を進める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
2	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
3	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
4	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
5	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
6	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
7	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
8	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
9	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
10	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
11	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
12	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
13	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
14	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
15	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

提出された論文の研究経過と内容、論文作成能力により評価する。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考

卒業研究Ⅳ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：4学年

必修選択：選択必修

■科目目標

卒業研究発表会にて研究内容を口頭発表にて説明するための、スライド作成・説明表現の技術を身につける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
2	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
3	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
4	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
5	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
6	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
7	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
8	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
9	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
10	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
11	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
12	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
13	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
14	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
15	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

発表能力及び修正提出された論文により評価する。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考